恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報

I

－山一證券国分寺独身寮建設に伴う調査－

1990年３月

国分寺市遺跡調査会

序

国分寺市内における縄文時代の遺跡は、市内を流れる野川流域に沿った通称「ハケ」とよばれる崖線上の武蔵野台地に集中しています。武蔵野台地は「恋ヶ窪谷」「さんや谷」「殿ヶ谷戸谷」「本多谷」などの谷戸により分割されており、遺跡はこうした谷に面した台地の縁辺部に発見され、崖線下には多くの湧水があります。これら遺跡群の中でも恋ヶ窪遺跡や羽根沢遺跡は古くから知られている遺跡で、過去に何回か調査が行われています。

このたびの調査は、恋ヶ窪遺跡や羽根沢遺跡の東側に位置し、恋ヶ窪東遺跡の名称で登録されている地域です。遺跡内中央に山一證券株式会社により独身寮を建設する工事が計画され、敷地内の建物予定地部分について記録保存を目的とした緊急調査を行いました。この調査により発見された遺構は、縄文時代中期中葉勝坂式期の住居跡と、同じく中期終末加曽利E式期の柄鏡形敷石住居跡です。特に敷石住居跡は、これまでに恋ヶ窪遺跡・羽根沢遺跡で発見されていますが、完全な形では今回が初めてで貴重な資料を得ることができました。

ここにその調査成果を報告書として公にする運びとなりましたことは、一重に調査団長をはじめとする調査団各位の御尽力の賜物であります。

本報告書が広く埋蔵文化財の保護普及に役立つとともに、調査により得られた資料が国分寺市の古代文化や歴史の解明に少しでも供することができれば幸です。

最後に、調査の主旨を理解され多大な御協力と御援助をいただいた山一證券株式会社の関係者各位、ならびに土地所有者である[redacted]氏に厚く御礼申し上げるしだいであります。

平成２年３月31日

調査会長　星　野　亮　勝

例　　言

1．本書は、山一證券国分寺独身寮建設に伴う発掘調査報告書である。

2．本調査は、山一證券㈱から国分寺市遺跡調査会に委託されたものである。

3．発掘調査は、平成元年４月１日から同年７月８日まで行い、整理および報告書作成は平成２年３月31日まで国分寺市遺跡調査会恋ヶ窪事務所で行った。

4．調査は広瀬昭弘が専従した。

5．本書の執筆・編集は、滝口宏・永峯光一・大川清・坂詰秀一の監修のもとに広瀬昭弘・上村昌男・上敷領久が分担し有吉重蔵、福田信夫がこれを助けた。執筆分担は下記の通りである。

広瀬昭弘　　Ⅳ・Ⅵ

上村昌男　　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴの土器

上敷領久　　Ⅴの石器

6．発掘調査から報告書の作成に至る過程で、次の方々から御教示、御協力をいただいた。

（敬称略、順不同）

森山哲和、秋山道生、砂田佳弘、山崎和巳、中村宣弘、品田圭二

7．発掘および整理参加者（敬称略、五十音順）

発掘作業

赤須敏夫、荒川修一、稲井亮、太田立也、後藤貴志、古山太一、篠原努、清水英雄、須賀義和、畑山豊、藤崎努、宮久保貴史、考古造形研究所、㈱中央航業、㈱前田建設

整理作業

井村みゆき、大城戸玲子、木村初江、楢岡ゆう子、長谷川光子、東清子、深瀬恵津子

凡　　例

本　文

1．国分寺市内の武蔵国分寺跡を除いた遺跡は、頭に「K」を冠し次に遺跡の番号と調査次数を記入する。

2．遺構は、各遺構毎に発見順に連続番号を付した。

3．本文中の出土遺物の番号は図面番号を用いた。例えば「5－1」とあれば「図面5－1」を指す。

図面・図版

1．遺構全体図に表示した数字は、国家座標第9系を用いて距離を表している。X軸が南北ライン、Y軸が東西ラインを示す。

2．断面図に表示した数字は、水糸レベルで海抜高を示す。

3．スクリーントーンの指示は次のとおりである。

①遺構　ローム層

②遺物　磨面　硬玉面

4．遺物分布図における記号の指示は次のとおりである。

①土器　□ 勝坂　☆ 阿玉台　△ 加曽利E　○ 縄文

②石器・礫　● 石器　■ 黒曜石　▲ 礫

5．写真図版の内、出土遺物の番号は図面番号と対照にした。例えば「5－1」とあれば「図面5－1」を指す。

6．遺構図面、遺物図面は次の縮尺に統一した。

遺構全体図　1/250　住居跡　1/50　集石土坑　1/25　土坑　1/50

土器実測図　1/3・1/6　土器拓本　1/3　土製品　1/3　石器実測図　2/3・1/3・1/6

7．遺物図版は次の縮尺に統一した。

土器復原完形　1/3・1/4　土器片　1/3　土製品　1/2　石器　1/1・1/3・1/6

本　文　目　次

序
例　言
凡　例
Ⅰ　調査に至る経過
Ⅱ　調査地区の概観
　1．調査地区の位置・立地
　2．層　序
Ⅲ　発掘経過
Ⅳ　検出遺構
Ⅴ　出土遺物
Ⅵ　小　結
　参考文献

挿　図　目　次

第1図　恋ヶ窪東遺跡と周辺の遺跡（1/10000）
第2図　遺跡周辺の地形（1/10000）
第3図　調査地区の位置（1/2500）
第4図　基本層序

表　目　次

第1表　調査工程表
第2表　出土土器集計表
第3表　出土石器集計表
第4表　出土石器計測表

図　面　目　次

図面1　遺構全体図
図面2　4号住居跡
図面3　5号敷石住居跡
図面4　4・5号集石土坑、3・4号土坑
図面5　4号住居跡出土土器
図面6　4号住居跡出土土器
図面7　5号敷石住居跡出土土器
図面8　4号集石土坑、3・4号土坑出土土器
図面9　遺構外出土土器
図面10　遺構外出土土器
図面11　4号住居跡出土石器
図面12　5号敷石住居跡出土石器
図面13　5号敷石住居跡、4号集石土坑、遺構外出土石器
図面14　遺構外出土石器

図　版　目　次

図版1　調査区全景
1．東側全景（西から）
2．西側全景（北から）
3．北側全景（東から）
図版2　調査区全景
1．中央全景（南から）
2．発掘風景（西から）
3．発掘風景（東から）
図版3　4号住居跡
1．4号住居跡全景（南から）
2．4号住居跡全景（東から）
3．4号住居跡東西土層断面（南から）
図版4　4号住居跡
1．4号住居跡南北土層断面（東から）
2．4号住居跡炉跡土層断面（北から）
3．4号住居跡遺物出土状態（南から）
図版5　4号住居跡、5号敷石住居跡
1．4号住居跡遺物出土状態（東から）
2．4号住居跡器台出土状態（北から）
3．5号敷石住居跡全景（西から）
図版6　5号敷石住居跡
1．5号敷石住居跡全景（南から）
2．5号敷石住居跡東西土層断面（南から）
3．5号敷石住居跡炉跡全景（南から）

図版７　５号敷石住居跡
１．５号敷石住居跡炉跡全景（西から）
２．５号敷石住居跡炉跡東西土層断面（南から）
３．５号敷石住居跡完掘全景（南から）
図版８　５号敷石住居跡
１．５号敷石住居跡完掘全景（西から）
２．５号敷石住居跡土器出土状態（西から）
３．５号敷石住居跡土器出土状態（北から）
図版９　４号集石土坑
１．４号集石土坑全景（南から）
２．４号集石土坑南北土層断面（東から）
３．４号集石土坑完掘全景（東から）
図版10　５号集石土坑
１．５号集石土坑全景（南から）
２．５号集石土坑東西土層断面（北から）
３．５号集石土坑完掘全景（南から）
図版11　３号土坑
１．３号土坑全景（南から）
２．３号土坑南北土層断面（東から）
３．３号土坑遺物出土状態（東から）
図版12　４号土坑
１．４号土坑全景（南から）
２．４号土坑東西土層断面（北から）
３．４号土坑遺物出土状態（北から）
図版13　５号敷石住居跡保存処理作業
１．５号敷石住居跡型取り作業風景（西から）
２．５号敷石住居跡型取り作業風景（南から）
３．５号敷石住居跡型取り作業風景（南から）
図版14　５号敷石住居跡保存処理作業
１．５号敷石住居跡型取り作業風景（西から）
２．５号敷石住居跡型取り作業風景（東から）
３．５号敷石住居跡型取り終了全景
図版15　４号住居跡出土土器
図版16　４号住居跡出土土器
図版17　５号敷石住居跡出土土器
図版18　４号集石土坑、３・４号土坑出土土器
図版19　遺構外出土土器
図版20　遺構外出土土器
図版21　４号住居跡出土石器
図版22　５号敷石住居跡出土石器
図版23　５号敷石住居跡、４号集石土坑、遺構外出土石器
図版24　遺構外出土石器

Ⅰ　調査に至る経過

昭和62年6月5日付国教社文収第284号にて、山一證券株式会社より国分寺市本町4丁目2877－3・8番地において独身寮新築工事を行いたい旨の届出が市教委文化財課に提出された。

寮建設予定地は国分寺市№57遺跡（恋ヶ窪東遺跡）の範囲に該当するため、試掘調査を実施しその内容により再度協議を行うこととした。

昭和62年8月6・7日の2日間、建設予定地内に13箇所のテストピットを設定し遺構や遺物の確認作業を行った。その結果、住居跡・土坑・小穴が検出され遺物も出土したため、あらためて本調査実施について協議を行い以下の内容で合意した。

①調査は建設工事により影響を受ける範囲全域を対象とし、発掘深度は縄文時代の遺構確認面であるローム層上面（地表より1m）を基本とする。それ以下に包蔵されている先土器時代の遺物については確認調査にとどめる。

②発掘調査に伴う敷地の仮囲い・調査事務所などの仮設工事および表土除去・残土処分・調査終了後の埋め戻しなどの土木工事は、工事請負費として調査費に組込み実施する。

③調査作業の内、遺物の実測・取り上げ作業についてはトータルステーションを使用し効率的に行う。

④現地調査終了後、調査会恋ヶ窪事務所において整理作業を行う。

⑤整理作業は、発掘調査報告書の刊行まで行う。

本調査は、平成元年4月1日より着手し同年7月7日に終了した。尚これら一連の調査は、国分寺市№57遺跡の5次調査（K57－5）として登録されている。

国分寺市遺跡調査会組織

（平成2年3月現在）

会　長	星野光勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副会長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会委員
理　事	永峯光一	東京都文化財保護審議会委員
理　事	坂詰秀一	東京都文化財保護審議会委員
理　事	大川　清	国士館大学教授
理　事	本多良雄	国分寺市長
理　事	内野孝治	国分寺市教育委員会委員長

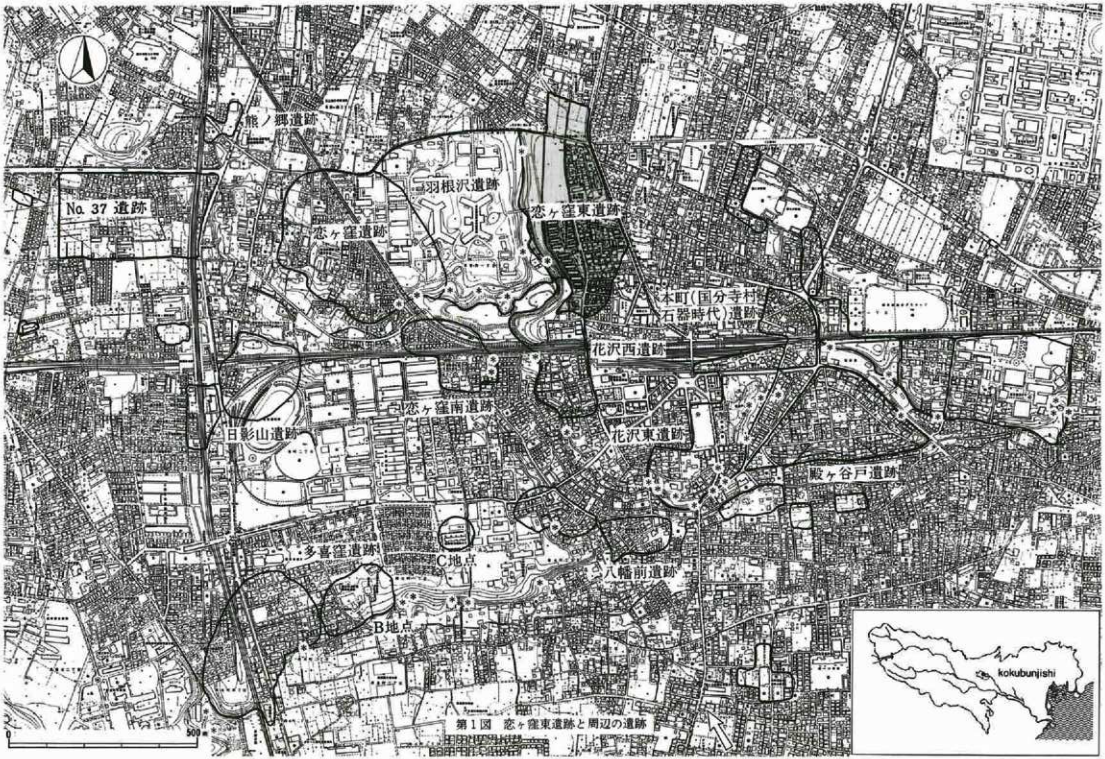
理　事	高橋俊司	国分寺市教育委員会教育長
理　事	星野亮雅	国分寺市社会教育委員会議長
理　事	藤間恭助	国分寺市文化財保護審議会委員
理　事	木多寅太郎	国分寺市文化財保護審議会委員
理　事	松井新一	国分寺市文化財保護審議会委員
理　事	吉田　格	国分寺市文化財保護審議会委員
理　事	北沢　俊	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
理　事	進藤文夫	国分寺市教育委員会社会教育部長
監　事	榎戸　潔	国分寺市社会教育委員会副議長
監　事	市橋三郎	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長

―― 事務局 ――

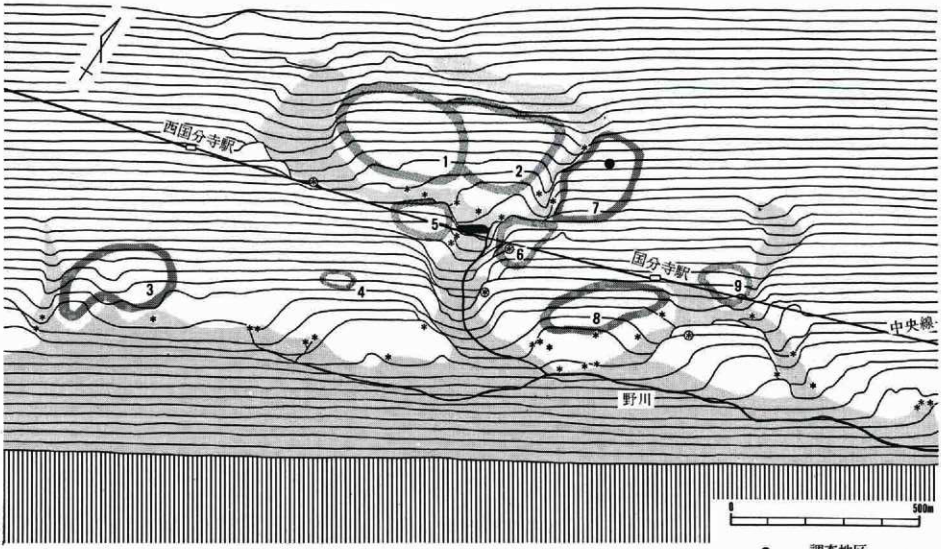
事務局長	野口武夫	国分寺市教育委員会文化財課長
事務主任	石川茂明	
事務局員	宇都宮精一	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
事務局員	鈴木　晃	国分寺市教育委員会文化財課庶務係員

―― 調査団 ――

調査団長	滝口　宏	東京都文化財保護審議会会長
主任調査員	有吉重蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係長
調査員	福田信夫	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
調査員	広瀬昭弘	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員 （平成元年７月退出）
調査員	上村昌男	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
調査員	上敷領　久	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係員
調査員	滝島和子	国分寺市教育委員会嘱託遺跡調査員



第1図　恋ヶ窪東遺跡と周辺の遺跡



1．恋ヶ窪遺跡　2．羽根沢遺跡　3．多喜窪遺跡A地点　4．多喜窪遺跡C地点　5．恋ヶ窪南遺跡

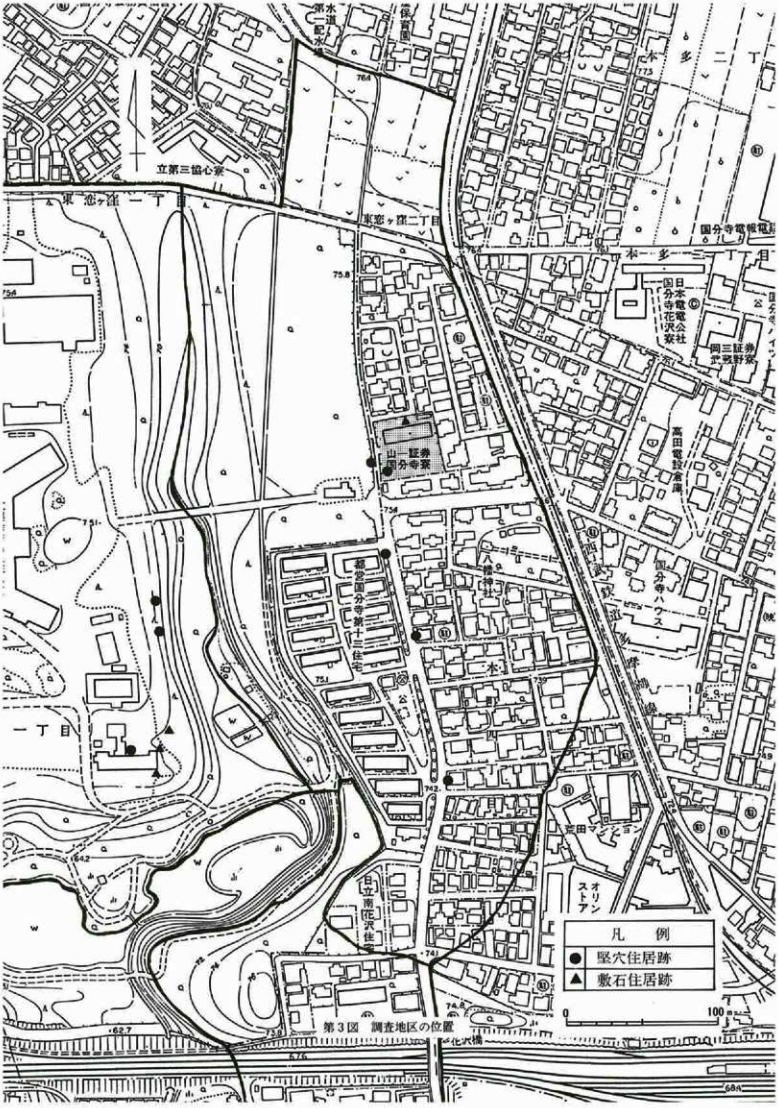
6．花沢西遺跡　7．恋ヶ窪東遺跡　8．花沢東遺跡　9．本町(国分寺村石器時代)遺跡

● 調査地区

✱ ⊛ 湧泉地

立川面・谷低地

第2図　遺跡周辺の地形


立第三協心寮
東恋ヶ窪一丁目
東恋ヶ窪二丁目
本多二丁目
国分寺電報電話
日本電電公社
国分寺花沢公舎
岡三証券
武蔵野寮
富田電設倉庫
山一証券
国分寺寮
八幡神社
国分寺ハウス
国分寺第十三住宅
本
公
一丁目
空田マンション
オリンストア
日立花沢住宅
凡　例
堅穴住居跡
敷石住居跡
100m

第3図　調査地区の位置

Ⅱ　調査地区の概観

1．調査地区の位置・立地

恋ヶ窪東遺跡は、国分寺市本町４丁目と日立中央研究所構内の一部分を含む東恋ヶ窪１丁目、それに２丁目にかけて所在する。その規模は東西250m、南北600mの範囲におよび、標高76mの武蔵野台地上に立地し、眼下には崖線からの湧水を集めつつ流れとなる野川の源泉を見下ろすことができる。

市内を流れる野川流域には小支谷や湧水地が数多くあり、その近辺には遺跡が点在している。それらの多くは縄文時代中期の遺跡として把えられており、本遺跡もその中の一つに数えることができる。

本遺跡の西側には比高差約12mで台地を区切るように南北に延びるさんや谷があり、谷をはさんだ対岸には縄文時代中期の敷石住居跡や竪穴住居跡、屋外埋甕、土坑、集石土坑などが発掘調査によって検出されている羽根沢遺跡がある。さらにその西側の同一台地上に小支谷をはさんで、縄文時代中期の勝坂式期より加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡が多数検出されている恋ヶ窪遺跡が立地している。本遺跡の南側には地つづきに花沢西遺跡があり、発掘調査により縄文時代中期前半・後半それに後期の遺構、遺物が発見されている。

調査区は本町４丁目24番地内で本遺跡のほぼ中央に位置し、西側にあるさんや谷より東に約100m台地内に入った地点である。調査区の周辺地域においてこれまでに店舗工事や公共下水道管埋設工事、電気ケーブル埋設工事に伴う発掘調査を４次にわたり実施している。その結果、縄文時代中期の勝坂式期や加増利Ｅ式期の竪穴住居跡、屋外埋甕、土坑、集石土坑が検出されている。その他、住宅建設やガス管・水道管等の埋設工事に際して立会い調査も行っており、そこからも中期の遺物が出土していることから縄文時代中期の遺構、遺物が包蔵されている遺跡と推察される。

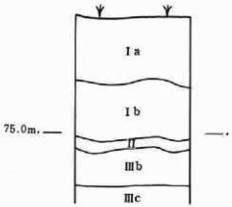
2．層　　序

調査区は武蔵野段丘に位置し、基本層序は調査区の南北土層断面を使用した。

Ⅰａ層　盛土　　旧建物による攪乱の層であり、コンクリート・砂利・山砂等が多くまじった土層である。

Ⅰｂ層　暗褐色土　　表土層であり、乾燥するとパサパサして崩れる。

Ⅱ層　黒褐色土　　粒子が粗く、粘性を欠く土層である。歴史時代遺構内の堆積土層に酷似する。



第4図　基本層序

Ⅲb層　暗茶褐色土　上部においてはスコリア粒子が少量まじり、下部にいくにしたがってスコリア粒子が多く含まれる。縄文時代の遺物包含層であり、本層の中位より遺構を確認することができる。

Ⅲc層　茶褐色土　ソフトローム層への漸移層である。

以上のような土層が確認され、縄文時代の遺構はⅢc層の上面にて検出された。傾向としては、南側へやや傾斜して土層が堆積しているようである。

Ⅲ 発 掘 経 過

山一證券株式会社国分寺独身寮建設に伴う発掘調査は、Ⅰ項で述べたように試掘調査を行った結果、縄文時代の遺構・遺物が存在する事が明らかとなり、建物建設工事により影響を受ける部分について全域にわたり本調査を実施する発掘方法がとられた。

以下、調査の概略を記することとする。

調査次数　　K57－5次調査として登録し発掘を行う。

試掘調査期間　昭和62年8月6日～同年8月7日　　実働日数2日間

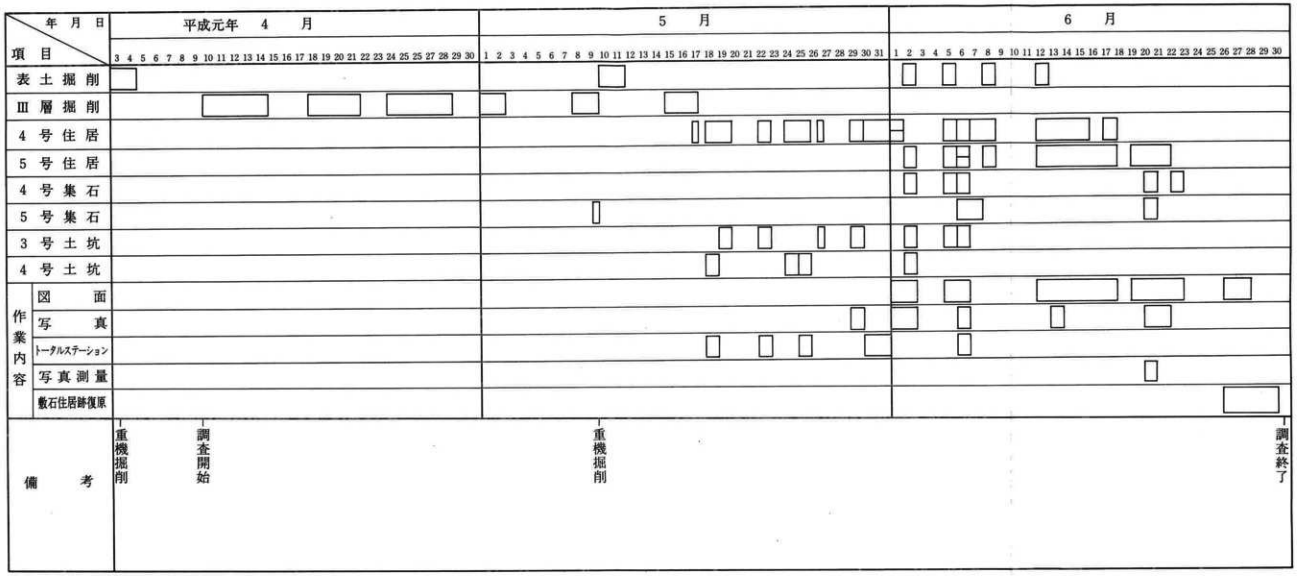
試掘調査面積　52㎡（2m×2m×13箇所）

試掘調査は遺構・遺物の確認調査にとどめ、本調査計画作成のために地表面から遺物包含層の深さや遺構確認面までの深さについて記録作業を行った。

本調査期間　　平成元年4月1日～同年7月7日　　実働日数63日間

本調査面積　　836.2㎡

本調査は、4月1日より重機による表土・攪乱層の掘削と搬出作業で開始され、次に遺物包含層の発掘・遺構確認作業へと進めていった。5月前半に包含層発掘による2次残土を搬出するために再度重機掘削を行っている。検出された遺構については写真測量を用いて実測を行い、それらの遺構から出土する遺物は測量機械（トータルステーション）により分布図を作成し取り上げ作業を実施した。遺構のうち5号住居跡は柄鏡形敷石住居跡であることが明らかとなり、復原保存のため合成樹脂により型取り作業を行っている。なお、本調査の進行状況については第1表にまとめてあるので参照されたい。


年月日
項目
平成元年 4 月
5 月
6 月
表土掘削
Ⅲ層掘削
4号住居
5号住居
4号集石
5号集石
3号土坑
4号土坑
作業内容
図面
写真
トータルステーション
写真測量
敷石住居跡復原
備考
重機掘削
調査開始
重機掘削
調査終了

第1表 調査工程表

Ⅳ 検 出 遺 構

恋ヶ窪東遺跡は、既往の調査概要についてでも触れたように、調査次数・面積が少ないことにも起因していようが比較的遺構密度の低い遺跡であり、近接する同時期遺跡の恋ヶ窪遺跡における密集性と比較すると対象的である。今回の第５次調査は本遺跡内では最もまとまった調査面積をもつが、やはり検出遺構は少なく住居跡２軒、集石土坑２基、土坑２基を数えるのみであった。

各遺構については以下に詳述するが、その形成時期は縄文時代中期勝坂式期から加曽利E式期にかけてである。なお、これら遺構のほかに小穴が73個見つかっている。

1）住居跡

4号住居跡（図面２　図版３～５）

〈位置〉調査区南西隅で検出された。西側道路部への広がりと南側の貯水槽による破壊のため遺構の一部は調査できなかった。

〈形状〉推定で長径７ｍ強、短径６ｍ程の楕円形を呈する大型の住居跡である。遺構確認面であるローム層上面から床面までの掘り込みは20～25cmを測るが、壁際では10～15cmと浅くなり壁面はあまり明瞭ではない。このため床面は中央部がやや低い状態となり、比較的堅緻である。周溝は廻っていない。

〈覆土〉遺構確認面から下部のみの観察である。住居跡中央部には細かいローム粒子を多量に含み、赤色スコリアや炭化物なども少量含まれる黒みの強い暗茶褐色土層が堆積している。そこから壁面に向かっては、徐々に色調が明るくなる暗茶褐色土層や茶褐色土層が覆っている。床面直上はローム層のブロックや粒子を主体とした暗黄褐色土層が覆っている。

〈炉〉住居跡中央部やや北側に位置し地床炉である。構造は二段になっており、長軸1.9ｍ、短軸1.3ｍの不整形で深さ５cmの浅い窪みがあり、その中程に深浅ふたつのピット状の掘り込みが穿たれている。浅い掘り込みの中には焼土粒子やブロックが多く含まれていて、底面には被熱でボロボロになったローム層が認められる。これに対し、深い掘り込みの覆土は焼土を僅かに含むだけの暗茶褐色土層や暗黄褐色土層となっている。

〈柱穴〉住居跡内からは29本が検出され、大きさや深さなどは様々である。その内P_1～P_{12}が、その配置や床面からの深度などからして主柱穴と考えられる。その場合８本柱となり、柱穴の建替えが想定される。各柱穴の深さは50cm弱と浅いものもあるが、他は60cm以上で80cm位までの深さを測る。

〈出土状態〉出土遺物はさほど多くなく散漫な分布を示すが、その広がりの中で住居跡内の北半部に偏る傾向が認められる。出土層位は床面より10～20cmほど上部の覆土中のものが多く、床面直上のものは少ない。図面２に示した７個体の土器は数少ない復原土器である。その内５－７の器台は住居跡南端近くで床面に密着した状態で検出され、すぐ脇に大型の礫が存在した。これら以外の土器は小破片が主体で器形をうかがえる資料はない。尚、住居跡中央部の覆土最上部より加曽利Ｅ式の土器が大型破片を含んでややまとまって検出されたが、覆土下部には入り込んでおらず住居跡に伴う資料とは言えない。

〈時期〉覆土や床面上の遺物からみて勝坂Ⅱ式期の住居跡である。覆土最上部出土の加曽利Ｅ式土器は、住居廃絶後なんらかの要因による意図的に廃棄した遺物と考えられよう。

５号敷石住居跡（図面３　図版５～８）

〈位置〉調査区北端で検出された。当初、土坑と考えられる落ち込みを検出し調査を進めたところ、敷地内ではあるが調査予定範囲の外に遺構が広がることが明らかとなり、調査区の拡張を行った。その結果、柄鏡形の敷石住居跡と確認され遺構の完掘がなされた。

〈形状〉主体部は直径3.6mの円形プランで、そこに幅1.1m、長さ1.3mの張出部がつく柄鏡形敷石住居跡である。張出部から奥壁までの全長は4.9mを測る。遺構確認面からの掘り込みは壁際で30～35cm、主体部中央部で45cmと深く、壁面は明瞭でしっかりしている。張出し部も主体部と同程度の掘り込みである。床面の状態は、周縁部敷石内側では比較的堅いローム層であるが、外側はやや軟らかく床面レベルも内側に比べて５cm前後高い。主軸はＮ－18°－Ｅ方向を示す。

〈覆土〉住居跡上部には黒みの強い暗茶褐色土層が少量認められるが、覆土のほとんどはローム粒子・スコリア粒子を含んだ茶褐色土層となっている。色調や含有物の種類・量などで分層したがその差異は僅かで漸移的である。壁際や床面近くはロームブロックやローム粒子を多く含む暗黄褐色土層となっている。９・10層はブロック状に存在する。

〈敷石〉敷石は主体部の炉辺部と壁周縁にほどこされている。炉辺部の敷石は主体部中央部にある石囲炉に接し、奥壁寄りに幅１m、奥行き0.5mの広さで長方形に敷かれ、敷石上面が平坦な面になるように組まれている。敷石には20cm前後の礫が用いられ、数点は石皿などの石器も含まれる。礫と礫との間には小さな礫を詰め、隙間を埋めるようにしている。敷石面のレベルは住居跡床面より５～６cm高く、平坦面の作出は礫面のうち平坦部の広い部分を上にし、更に形に合わせて住居跡床面下への掘り込みで調整している。敷石の南西縁部は炉の石囲が敷石面に入り込むようになって一体化している。このような状況からみて、敷石と石囲炉は住居構築時に同時に造られたものと考えられよう。

周縁部敷石は円形主体部の壁際を方形に区画するように幅20～30cmで帯状に廻っている。奥壁部が遺存状態良好なのに対し、西側と南側はあまり良くなく欠失する部分もある。尚、出入口部の敷石は全体には施されていなかった事も考えられる。また、出入口部から炉に向かっても僅かな礫の散布が認められたが、面的に広がりをもって敷かれていたものかどうかは明らかでない。敷石に用いられる礫はほとんど円礫で、炉辺部のものよりやや小さく10～15cmの拳大程度の礫が多い。敷石の構造は、礫の長軸方向をそろえて床面より10cm程高く一列状になるように並べておき、それを支えるかのように外側に床面より５～10cm程高い状態に礫を配置している。奥壁部では内側にも礫を配置している。敷石部には土器が少量含まれていて、北西隅で７－１のひさご形をした小型土器が敷石上面にのせられたように出土し、南東隅でも敷石に寄せ掛けるように７－２の小型土器が出土した。周縁部敷石面の底面は、炉辺部敷石と異なり住居跡床面にくい込むことがなく僅かに浮いた状態で検出され、敷石の下部からは柱穴が検出された。これらの事から周縁部敷石は住居廃絶後、住居の上屋がなくなった状態の時に施されたものといえよう。但し、敷石と床面との隙間が僅かであることなどからみて住居廃絶とさほど時間的隔たりはないと考えられる。

炉辺部敷石や周縁部敷石の他に住居跡張出し部にも礫は認められた。住居床面に置いたような状態で５個の大型礫が検出され、そのあり方は周縁部敷石に似ている。礫上面のレベルは床面より10cm程高く、礫の中には台石と思われるものや石皿が含まれる。礫の脇からピットが検出された。

〈炉〉主体部中央に位置し、炉縁全周を石で囲った石囲炉である。65×60cmの楕円形を呈し、炉石の一部は炉辺部敷石の中に組み入れられ一体化している。炉縁を囲む石は炉辺部敷石と同程度の大きさの礫で、石皿の転用も認められる。住居跡床面からは20cm程の掘り込みがあり、底面は被熱により赤化している。炉石は炉辺部敷石とほぼ同じレベルで、住居跡床面より10cm程飛び出ている。覆土は暗茶褐色土で少量の焼土粒子を含む。炉覆土や石囲の間から20点弱の土器片が出土した。

〈柱穴〉柱穴配置は主体部の壁周縁に小ピットを廻らした壁柱穴タイプである。小ピットは周縁部敷石の下部より17本が検出され、30cm程の間隔をもって主体部を廻っている。いずれも直径が20cm前後の小さいもので、細かいローム粒子を含む茶褐色土を覆土としている。床面からの深さは40cmを越すものが13本を数え、他の４本はやや浅い。また、出入口部には主体部から張出部に向かって主体部を廻るものと同規模のピットが対に穿たれている。床面からの深度は20cm前後で主体部の浅いものと同じ位である。張出部先端には直径50cm、深さ25cmほどのピットが検出されたが、埋甕は認められなかった。

〈出土状態〉本住居跡の出土遺物は非常に少なく、土器200点弱・石器15点を数えるのみであ

る。しかも、出土遺物の大半は張出部からの出土で、主体部覆土や床面上からの遺物は僅かばかりである。尚、石器は出土点数の殆どが敷石部に含まれていた石皿や磨石である。張出部の出土層位は遺構検出面に近い覆土上部のものが多く、敷石上の礫よりは浮いた状態であった。遺物は加曽利E式第Ⅶ段階の大型破片を含む土器や、分割礫などである。図面3の下に出土土器の一部を示した。7－1は周縁部敷石の北西隅敷石上面から出土したひさご形をした小型土器。7－2は同じく周縁部敷石の南東隅で検出された小把手がつく小型土器である。7－3～9は張出部や出入口部出土の深鉢形土器の破片である。いずれも加曽利E式第Ⅶ段階に属する。

〈時期〉住居跡出土遺物より、加曽利E式期第Ⅶ段階の住居跡である。

2）集石土坑

4号集石土坑（図面4　図版9）

〈位置〉調査区のほぼ中央に位置する。

〈形状〉遺存状態良好な集石で、直径1.4mの円形を呈する土坑の内部から上面にかけて隙間なく密に礫がつまっている。土坑の掘り込みは検出面から40cmを測り、断面形はすり鉢状をなす。礫は底面直上まで壁際を除き密に含有される。覆土は礫を含有する中央部では炭化物を多く含んだ黒褐色土となっている。

〈礫の状態〉集石は総数2,800個弱の礫で構成され、重量は160.5kgを計る。平均重量は57.9gとなるが、殆どが5cm前後の大きさの破砕礫のため全体の30%は10g以下の重量である。礫は強弱の差はあるものの全て被熱しており、赤化したりタールの付着したものも認められる。石質は砂岩が70%弱、チャートが27%近くを占め、これ以外は僅かである。用礫どうしの接合も少量認められる。

〈時期〉集石内から勝坂式と阿玉台式の土器が少量検出された。詳細の段階は明らかにできないが勝坂式期の遺構である。

5号集石土坑（図面4　図版10）

〈位置〉調査区南端中央部で検出された。

〈形状〉遺構確認面であるローム層上面で、75×70cm程の範囲に礫の集積を検出した。4号集石土坑より大型な礫で構成され、集石下部に浅い土坑をもつ。礫の分布範囲は集石下部の土坑の片側に偏るがほぼ土坑内に収まる。集石下の土坑は90×80cmの不整円形で、遺構検出面からの掘り込みは10cm程と浅く、断面形は皿状を呈す。礫と礫との間には僅かに隙間があり、土坑上面にまとまる。

〈礫の状態〉76個の礫で構成され、総重量54.6kgを計る。礫1個の平均重量は719gと大きい。

礫は直径10～15cmで重量500g前後の大型なものが比較的多く、完形礫の割合が25%と高く、完形礫以外のものも残存率がよい。石質比率は4号集石とほぼ同じで、砂岩が65%、チャート28%と2種類で90%以上を占める。礫表面にタールの付着などもあり、被熱の強いものが多い。

〈時期〉集石内から土器の出土はなかったが、周辺には縄文中期の土器片が認められるので縄文中期の集石であろう。

3）土坑

3号土坑（図面4　図版11）

〈位置〉調査区中央部やや北側に位置する。

〈形状〉長径2.3mの不整円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは25cmを測り、断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。覆土は2層に分層され、上部は茶褐色土で底面近くは暗黄褐色土となっている。

〈出土遺物〉土坑内およびその周辺から、勝坂式と阿玉台式の土器片が160点近く出土した。石器は剥片が1点出土した。

〈時期〉出土遺物より勝坂Ⅱ式期の土坑である。

4号土坑（図面4　図版12）

〈位置〉調査区中央部やや北側で3号土坑と5号敷石住居跡との間に位置する。南半部は既存建物の基礎により破壊されている。

〈形状〉直径2.4mの円形を呈する。遺構確認面からの掘り込みは15cm程で浅く、断面形は皿状で立ち上がりは緩やかである。覆土は2層に分けられ、上部は暗茶褐色土で下部は暗黄褐色土である。

〈出土遺物〉33点の土器が出土し、時期が明らかな12点は勝坂Ⅱ式である。石器は打製石斧が1点出土した。

〈時期〉出土遺物から勝坂Ⅱ式期の土坑である。

4）小穴（図面1　図版1・2）

小穴は73個検出され、形状は楕円形を基調とするが定まらない。深度は10～20cm程と浅く、覆土は茶褐色土を主体とする土層が堆積する。これらの小穴より出土された遺物は勝坂Ⅱ式期のもので、4号住居跡とさほど隔たりをもたない時期であろう。

V 出土遺物

遺物は縄文土器・石器・礫があり、コンテナ25箱が出土している。これらの中で住居跡や集石土坑・土坑内より検出されたものと、遺構外の遺物包含層より出土し図示が可能なものについて記述し、補足として表を添付した。

1）土器

4号住居跡出土土器（図面5・6　図版15・16）

本住居跡より823点の土器又は土器片が出土しこれは全体の38.2%である。このうち復原実測したものは住居跡の床面上より出土したもので、他の拓本実測分は覆土上層より検出された遺物である。

5－1．把手を有する口縁部の破片で、推定口径30cm、残存高10cmを測る。文様は半截竹管による平行沈線で区画文を表出し、その区画内に沈線による楕円文内に刻目文を配するものと集合沈線文を施すものとがある。その下には竹管によって描き出された隆帯が表出され、隆帯上には爪形文が施されている。

5－2．口縁部に小把手を有する口縁部から胴部の破片で、推定口径20cm、残存高15.2cmを測る。器形は直線的で底部に向かって徐々に窄まる。文様は隆帯による楕円区画を表出し、ヘラ状工具とペン先状工具による押引きが施される。

5－3．口縁部から胴部にかけての破片で、推定口径28.8cm、残存高22.6cmを測る。口縁部の文様は、重三角区画文に竹管による刺突と波状沈線が施される。頸部には波状沈線が1条めぐり、胴部は隆帯による区画に竹管による刺突と波状沈線が行われる。胎土は大粒の礫を含み焼成は悪くやや軟質である。

5－4．推定口径36.0cm、推定底径15.6cm、器高18.2cmを測る浅鉢形土器で、現存部は全体の1/2弱である。口縁部の文様は、隆帯による楕円区画内にヘラ状工具の刺突が行われ、その連結を隆帯上に竹管による刺突を施した円形の小突起で行っている。胎土は金雲母を多く含み、焼成はかなり良い。

5－5．胴部下端から底部にかけての破片で、底径9.6cm、残存高8.4cmを測る。文様は隆帯を「X」字状に連結させることにより菱形の区画が表出され、隆帯に沿って両側にペン先状工具による押引きが2条施されている。

5－6．胴部下端から底部にかけての破片で、推定底径5.6cm、残存高6.2cmを測る。文様帯は、半截竹管による横方向の平行沈線により2つに分かれる。上部には円形の刺突文と沈線が、下部は縦方向の平行沈線と上部と同じ刺突文が施されている。地文は縦・横方向のＲＬの縄文

である。

５－７．脚部の大半が欠損している逆台形を呈する器台である。台部径20.0cm、推定底径12.4cm、器高7.6cmを測り、残存脚部の側面に径1.5cmの貫通孔を１個有する。文様は、半截竹管による平行沈線とペン先状工具による刺突文が施される。胎土は緻密で細かい砂粒を含む。以上実測個体のうち、５－３は阿玉台式に比定され他は勝坂Ⅱ式である。

５－８は、隆帯による区画に沿ってヘラ状工具による押引きとペン先状工具による刺突が施される。５－９は、隆帯による区画に沿って棒状工具の刺突と押引きが施される。５－10は口縁部の破片で、隆帯による重三角区画文に沿ってヘラ状工具の刺突が行われ、その中に玉抱き三叉文が施される。５－11は、隆帯による区画に沿って竹管の刺突を行いその内側に波状沈線が施される。５－12は、ヘラ状工具の押引きに沿って沈線が施され、その中にペン先状工具による刺突が波状に行われる。５－13は、隆帯に沿って竹管の平行沈線が施されペン先状・ヘラ状工具による刺突が行われる。５－14は口縁部の破片で、隆帯による区画に沿ってヘラ状工具による刺突がめぐり、その中に波状沈線とペン先状工具の刺突が施される。５－15・23は、隆帯に沿ってヘラ状工具の刺突とペン先状工具の波状刺突が施される。５－16は、竹管による押引きと波状の押引きが施される。５－17・18は、ペン先状工具による刺突と波状沈線が施される。５－19は口縁部の破片で、口縁部下にヘラ状工具による刺突がめぐり、その下より波状沈線と平行沈線が斜めに垂下する。５－20・21は、隆帯に沿ってヘラ状工具の刺突が施される。５－22は口縁部の破片で、ＲＬの縄文を横位に施文し隆帯に沿って竹管による押引きが施される。５－24は、隆帯に沿って竹管による粗い刺突が施される。５－25は把手部分の破片で、波状の隆帯とヘラ状工具による刺突が施される。５－26・27は、ヘラによる刻み目を持つ隆帯に沿って竹管による刺突がめぐり、その周りにペン先状工具による刺突が施される。６－１は口縁部の破片で、ＲＬの縄文を横位に施文し、棒状工具の刺突による波状沈線と竹管の刺突が施される。６－２・３・４は同一個体で、口縁部には沈線と波状沈線、胴部破片には隆帯による楕円区画が鎖状に連結し、その中にペン先状工具による刺突が施される。他の胴部破片には隆帯の上に集合沈線を描き、隆帯に沿ってヘラ状工具による刺突と波状沈線が施される。地文はＲＬの縄文が横位に施文されている。６－５は口縁部の破片で、ＲＬの縄文を横位に施文し、竹管の刺突と棒状工具の刺突による波状沈線が施される。６－６は、半截竹管による平行沈線を行いそれに沿って竹管の刺突が施される。６－７は、隆帯による区画を行いその上を竹管で刺突し、隆帯に沿って半截竹管の平行沈線を配しヘラによる刻み目が施される。以上の土器片は勝坂Ⅱ式に比定される。

６－８・12は口縁部と胴部の破片で、隆帯による区画を行いそれに沿って円形竹管を斜めに刺突している。６－９・10・11・13・14は口縁部・把手・胴部などの破片で、隆帯に沿って棒

状工具による押引きが施される。6－15・16は同一個体の口縁部破片で、「T」字状の刻みを二段配しその下に隆帯が1条めぐる。6－17は、「X」字状に隆帯の貼り付けを行う。6－18は、胎土に大粒の礫を含み粗い爪形文を施す。6－19は、無文の土器で粘土のつなぎ目が明瞭に残る。6－20・21・22は同一個体の口縁把手部分・胴部の破片である。把手は隆帯を貼付しその上面に棒状工具による押圧と刺突を行い、隆帯に沿って竹管による押引きが施されその内側に波状沈線を配している。胴部は隆帯による区画を行いそれに沿って竹管による押引きが施される。6－21は、竹管による押引きと爪形の刺突が施される。以上の土器片は阿玉台式と考えられる。

6－23・24はどちらも口縁部の破片で、口縁部下端に先の丸まった棒状工具による押引きが2条めぐる。胴部は沈線による「∩」状の区画が行われ磨り消しが施される。地文はＬＲの縄文が横位に施文されている。6－25は口縁部から胴部の破片で、口縁部に隆帯による楕円区画を行い、胴部上端に隆帯が1本めぐり沈線が2条垂下する。地文は横位に施文したＬＲの縄文で、磨り消しを施している。以上3点は加曽利Ｅ式第Ⅴ段階である。

土製品

6－26. 無文の土器片を使用し周辺を擦って仕上げられている土製円盤である。径2.9cmの隅丸方形を呈し、厚さ0.8cm、重量7.8ｇを測る。

5号敷石住居跡出土土器（図面7　図版17）

本敷石住居跡より出土した土器又は土器片は172点を数え全体の8.0%を占める。このうち実測が可能な資料は10点でいずれも敷石上面より検出され、他の拓本実測したものについては7－15を除き敷石内より出土している。

7－1. 胴部上下に1対ずつ有孔摘みを貼り付けた甕単形の器形で、口径4.6cm、底径4.8cm、器高12.5cmの小形壺である。口縁部には1本の隆帯がめぐり、穿孔が1個認められる。胴部は隆帯による渦巻文が左右対称に施され、上下の摘み部分は隆帯により連結される。

7－2. 口径6.7cm、底径5.0cm、器高13.3cmを測る小型の土器で、胴部は内彎し口縁部はほぼ直立の器形である。口縁部に1本の隆帯がめぐり把手部分で連結し、胴部はヘラ状工具による沈線とＲＬの縄文を縦位又は斜位に施文し、さらに磨り消しが行われている。

7－3. 口縁部から胴部の破片で、推定口径20.0cm、残存高15.8cmを測る。地文はＲＬの縄文を縦位・横位又は斜位に施文し、胴部より口縁部下端にかけて「Λ」状の沈線で区画を行いその中を磨り消している。胎土は緻密で木目が細かい。

7－4. 推定口径20.4cm、残存高17.4cmを測る口縁部と胴部の破片で、胴部より内彎する器形である。口縁部は丁寧な研磨による無文帯で、地文はＲＬの縄文を縦位又は横位・斜位に施

文している。口縁部下には貫通していない補修孔が１個ある。胎土はやや大粒の礫を含む。

７－５．胴部下半部の破片で、残存高は14.0cmを測る。地文はＲＬの縄文を横位に施文し、胴部下端に「Ａ」状に沈線で区画を行い、ＲＬの縄文を一部残して磨り消しを施している。

７－６．胴部の破片で残存高は14.0cmを測る。文様は沈線が１条めぐり、ＲＬの縄文を縦位または横位に施文し、下部は磨り消しを行っている。

７－７．底部と胴部の破片で、底径5.0cm、残存高7.2cmを測る。地文はＬＲの縄文を縦位に施文し、胴部より底部にかけて沈線を垂下させ、磨り消しを行っている。

７－８．胴部と底部の破片で、推定底径8.0cm、残存高11.0cmを測る。現存の上端部に僅かにＲＬの縄文を残し、磨り消しが行われている。

７－９．胴部と底部の破片で、推定底径10.0cm、残存高12.3cmを測る。内外面ともに丁寧な研磨が施されている。胎土は細かい砂礫を少量含み、焼成は良好である。

７－11・12・13は同一個体の胴部破片で、ＲＬの縄文を横位に施文しその上を指で撫でて微隆起の区画を表出している。７－14・17は同一個体の胴部破片で、ＲＬの縄文を横位に施文し沈線による区画内を磨り消している。７－15は口縁部から胴部の破片で、口縁部無文帯の下にＲＬの縄文が縦位・横位に施文される。７－16は胴部の破片で、ＲＬの縄文が横位に施文される。７－18は、横位に施文されたＲＬの縄文に沈線が施される。７－19・20は無文の胴部破片である。７－21は径9.2cmの底部破片である。

以上の土器は、全て加曽利Ｅ式第Ⅶ段階に比定される。

土製品

７－10．球状を呈する土製品で、中央に孔を持ち半分が欠損している。径は2.8cm、残存高1.3cm、孔径0.35cmで重量7.6ｇを測る。

４号集石土坑出土土器（図面８　図版18）

本集石土坑より出土した土器片は12点で、これらの内拓本実測したものは集石内から検出された遺物である。

８－26は把手部分の破片で、隆帯を貼り付けその上に竹管の刺突による爪形文が施される。８－27は、隆帯を貼り付けそれに沿って竹管による押引きが施される。８－28は、隆帯に沿ってペン先状工具による刺突と波状沈線が施される。これらの土器は勝坂Ⅱ又はⅢ式と考えられる。

３号土坑出土土器（図面８　図版18）

本土坑より出土した土器片は159点を数え、拓本実測したものは覆土中より検出されたもの

で土坑底面より出土した遺物はない。

8－1．口縁部から胴部の破片で、推定口径41.2cm、推定底径13.0cm、器高14.2cmを測る浅鉢形土器である。内側より2個の補修孔があり、その内1個は貫通していない。表裏面ともに丁寧な研磨が施され、胎土にはやや大粒の礫が含まれている。

8－2は、ペン先状工具による刺突が施される。8－3は口縁部の破片で、棒状工具による押引きが施される。8－4は底部に近い部分の破片で、隆帯に沿ってヘラ状工具による刺突と波状沈線が施される。8－5は胴部の破片で、隆帯による区画文を表出しそれに沿ってペン先状工具による刺突を行い、ヘラ状工具による爪形文と波状沈線を施す。遺構外出土の9－2・10－9は同一個体である。8－6・7・10は胴部の破片で、隆帯を貼り付けその上に沈線を施し、隆帯に沿って竹管による刺突をめぐらしその外側に波状沈線を行う。さらにヘラによる刻み目と円形竹管の刺突が施される。8－8は、隆帯を貼り付けその上に沈線を施し、隆帯にそって竹管による刺突とその外側に串状工具の刺突による波状沈線が行われる。8－9・11・12は口縁部と胴部の破片で、隆帯を貼付しそれに沿って竹管による押引きが施され、その内側に波状沈線を行う。地文はＲＬの縄文を横位に施文している。8－13・14は、隆帯を貼付してそれに沿ってやや太めの竹管による押引きが施される。8－15・16・17・18は口縁部と胴部の破片である。口縁部は無文で、胴部には隆帯による区画文を表出しそれに沿って竹管の押引きが行われ、その中に竹管の押引きによる波状文が施される。8－19は、粘土紐のつなぎ目と指頭痕が残る。

以上のうち、8－3・19は阿玉台式その他は勝坂Ⅱ式に比定される。

4号土坑出土土器（図面8　図版18）

本土坑の覆土中より33点の土器片が出土しており、このうち図示が可能なものについて拓本実測を行った。

8－21．小型壺形土器の胴部と底部の破片で、底径4.2cmを測る。胴部上半は沈線を弧状に施し横方向の沈線が1条めぐり、それ以下は縦方向の沈線が底部まで至っている。

8－20は、半截竹管による平行沈線の楕円区画内に、同じく半截竹管による平行沈線が施される。8－22は、隆帯を貼付しそれに沿って竹管による刺突が施される。8－23は、隆帯に沿って竹管による押引きが施される。8－24は、隆帯を貼付しその上に竹管による刺突を行い、隆帯に沿って半截竹管による刺突が施される。8－25は、隆帯を貼付しそれに沿ってペン先状工具による刺突が施される。

以上、勝坂Ⅱ式に該当する。

遺構外出土土器（図面９・10　図版19・20）

遺構外より出土した土器および土器片は907点を数え全体の42.1%を占める。これらの遺物は包含層であるⅢｂ層より検出され、分布の傾向としては調査地区の中央から南側にかけて勝坂式期の土器片、北側に加曽利Ｅ式期の土器片が出土している。

９－１．口縁部と頸部の破片で、推定口経26.4cm、残存高11.6cmを測る。器形は、口縁部が内彎するキャリパー形を呈する。文様は、隆帯による重三角区画文に沿ってヘラ状工具による押引きを行い、その中に玉抱き三叉文が施される。９－27は同一個体である。

９－３．推定口径35.2cm、残存高13.5cmを測る口縁部と胴部の破片で、口縁部が内傾する浅鉢形土器である。口縁部上端に棒状工具による押圧を行い、側面に押引きが施される。胎土は緻密で細かい砂粒がまじり、焼成は良好である。

９－６．推定口径42.0cm、残存高12.0cmを測る口縁部と胴部の破片で、直線的に外傾する浅鉢形の土器である。口縁部の一部に粘土紐が波状に貼り付けられ、胴部は無文である。

９－９．口縁部が強く内彎する器形の浅鉢形土器で、穿孔をひとつ有する。

10－32．口縁部と胴部の破片で、推定口径26.0cm、残存高10.4cmを測る。無文の口縁部下端に１条の沈線がめぐり、それ以下はＬＲの縄文を横位又は斜位に施している。

以上実測個体のうち、９－３は勝坂Ⅰ式、９－１・６・９は勝坂Ⅱ式、10－32は加曽利Ｅ式第Ⅶ段階に比定されよう。

９－４・10・11・12は、隆帯を貼付しそれに沿って竹管による刺突・押引きが行われ、その内側に波状沈線が施される。９－５・７・14・22は、隆帯を貼付しそれに沿って竹管やペン先状工具による刺突を行い、波状の刺突又は押引きが施される。９－８・10－５は、隆帯に沿ってヘラ状工具による刺突と竹管による平行沈線が施される。９－13は、口縁部が内傾する浅鉢形土器で、外面に隆帯が貼り付けられている。９－15は、隆帯を貼り付けその上にＲＬの縄文を横位に施文し、隆帯に沿って竹管による刺突と波状沈線を施す。９－16は、隆帯に沿って竹管とペン先状工具による刺突を行い、隆帯の上にヘラによる刻み目が施される。９－17は口縁部の破片で、隆帯による区画を表出しそれに沿って竹管による刺突を行い、区画内に波状の沈線を施す。９－18・19は、隆帯を貼付しそれに沿ってペン先状工具による刺突を行う。９－20・23は、隆帯を貼付しそれに沿って竹管による刺突又は押引きが行われ、その内側に波状沈線が施される。９－21は、隆帯を貼付しそれに沿って竹管による押引きが行われる。地文はＲＬの縄文を横位に施文している。９－24は、隆帯を貼付しそれに沿ってペン先状工具による刺突と波状沈線が施される。９－25は、竹管による平行沈線と刺突を行い、ヘラによる波状沈線と刺突の範囲内にＲＬの縄文を横位に施文する。９－26・31は口縁部と胴部の破片で、ＲＬの縄文

を横位に施文し波状沈線を施す。9－28は底部に近い部分の破片で、竹管による平行沈線とヘラによる刺突が施される。9－29は、隆帯を貼付しその上に竹管による刺突を持ち、隆帯に沿って竹管による刺突が行われ波状沈線が施される。9－30は口縁部の破片で、竹管による刺突がめぐりペン先状工具の刺突が施される。9－32は、ＲＬの縄文を横位に施文しペン先状工具による刺突を波状に施す。9－33は、ＲＬの縄文を横位に施文し竹管による平行沈線を施す。9－34・35は同一個体の胴部破片で、Ｌの無節縄文が横位に施文され一部分磨り消しが行われる。10－１・２・３は同一個体で、隆帯を貼付しその上に爪形文を配し、隆帯に沿って半截竹管による平行沈線をめぐらしその内側に刻目文が施される。10－４は、ＲＬの縄文を横位に施文しヘラ状工具による刺突が施される。10－７は、竹管による平行沈線で区画を行い、その内側に竹管による押引きと串状工具の刺突による波状文が施される。以上の土器片は、勝坂Ⅱ式と考えられる。

10－６・19は口縁部の破片で、竹管による押引きが施される。10－20は口縁部の破片で、竹管による押圧と押引きが施される。勝坂Ⅰ式に該当する。

10－８は口縁部の破片で、隆帯の貼り付けが施される。10－10・26は口縁部と胴部の破片で、隆帯を貼り付けペン先状工具による押引きが施される。10－11は口縁部の破片で、ヘラ状工具による押引きが施される。10－12・13は口縁部に小把手を貼付し隆帯をめぐらす器形で、円形竹管による押圧・押引き・刺突が施される。10－14・15は口縁部の破片で、隆帯を貼り付けそれに沿って竹管による押引きが施される。10－16は口縁部の破片で、隆帯を貼り付けそれに沿って竹管の内側を使用し押引きを施す。10－17・18は同一個体の口縁部破片で、ヘラ状工具による刺突が施される。10－21は口縁部の破片で、竹管による押引きが施される。10－22は、ヘラ状工具による波状沈線と刺突が施される。10－23は口縁部の破片で、隆帯の貼付による楕円区画を行い、その内側に隆帯に沿って３本単位の串状工具による有節線文と波状沈線が施される。10－24・31は口縁部に近い部分の破片で、隆帯を貼り付けヘラによる沈線が施される。10－25は口縁部の破片で、丁寧な研磨が行われる。10－27は、粗い刺突が施される。10－28は波状の口縁部破片で、口唇部に棒状工具による押圧が施される。10－29は、隆帯を貼付し指頭による押圧を行う。10－30は口縁部の破片で、ヘラ状工具による沈線と有節線文が施される。以上、阿玉台式に比定される。

10－33は口縁部の破片で、口縁部下に沈線がめぐりＲＬの縄文が残る。加曽利Ｅ式第Ⅵ段階と考えられる。

10－34は、ＬＲの縄文を横位に施文し沈線を２条垂下させその間を磨り消している。加曽利Ｅ式第Ⅴ段階である。

10－35・36は口縁部と胴部の破片で、ＬＲの縄文を横位又は斜位に施文し沈線による区画を

行い磨り消しが施される。縄文後期の称名寺式に比定される。

2）石器

4号住居跡出土石器（図面11　図版21）

本住居跡より出土した石器・礫の総数は186点で全体の62.8%を占め、これらの遺物は全て覆土中より検出された。

石　鏃

11－1．左右対称の二等辺三角形を呈し、先端部の縁辺が僅かではあるが両側に肩部を持ってすぼまっている。調整は丁寧で両面に敲調整が施され、縁辺部はやや鋸歯状に仕上げている。基部には深い三角形の抉りが入り、両脚の端部は尖っている。

石　匙

11－2．楕円形で鋭利な縁辺部を持つ第一次剥片を素材としており、調整は打瘤の除去と両側からの抉り部の形成で行われている。刃部は剥片の縁辺をそのまま利用し敲調整が部分的に認められる。

掻　器

11－3．不定形の剥片を素材としており、歪んだ円形を呈し片面には自然面を残す。刃部は表裏面からの交互剥離によって作られている。

11－4．横長の剥片を利用しており片面には自然面を残す。刃部は剥片の縁辺をそのまま利用しているが磨滅して判然としない。

硬玉製原石

11－5．隅丸の三角形状を呈しており部分的に磨滅している。硬玉製品を作るための素材を剥離した痕跡は認められない。

打製石斧

11－6．縁辺部の一方がほぼ直線的であるのに対し他方は山形を呈しており、胴部下半は欠損の後再調整されている。調整は縦長剥片を利用し、裏面に主剥離面を残すため側縁部は剥片の縁辺をそのまま使用しようしており、連続する細剥離で調整されている。表面は不定方向からの剥離によって調整されており、石核段階での剥片剥離の際にできた稜線の除去が行われている。刃部は表面に自然面を残し、裏面の下端からの１回の剥離と左からの細剥離で調整し、円刃で断面は鋭い「V」形に整形されている。

11－7．横長で比較的厚手の第一次剥片を素材としており、側縁部の調整は打瘤の除去を含めて連続する細剥離で調整されている。表面は両側縁から中央部に向けて剥離が行われ、基部周辺と胴部に自然面が残っている。裏面は四方向からの大きな剥離によって調整され、刃部は表面から２～３回の細剥離によって調整されているが、剥片の縁辺部を刃部に利用しておりほ

ぼ直刃である。

11－8．縦長で比較的厚手の第一次剥片を素材としており、両側縁部ともに丁寧な階段状剥離によって調整されている。表面は打点部にやや厚み持つものの比較的平坦で、第一次剥離の際の自然面を側縁部調整を除くほぼ全面に残している。裏面は左方向からの大きな剥離と右方向からの細剥離によって調整されている。刃部は欠損の後に再生が行われ斜刃で断面は鋭い「V」形である。

11－9．横長で比較的厚手の第一次剥片を素材としており左右対称である。基部の欠損部は周辺からの丁寧な調整によって平坦面が形成されている。胴部断面は楕円形を呈し、両側縁部ともに細剥離調整により丸みを持たせ、左側縁には敲打痕が認められる。表面には刃部から胴部にかけて部分的に自然面が残り、裏面は第一次剥離の際の主剥離面を残す。刃部調整は裏面の下端から1回の大きな剥離によって断面を「V」形に調整し、微調整を施して直刃の刃部を作出している。

11－10．胴部で割断しており表裏面の剥離痕を観察すると、接合部における剥離の方向が著しくずれているため割断後に再利用されたと思われる。両側縁部表面では連続する細剥離が行われ、裏面は両側から2～3回の大きな剥離がなされており、断面は半月形を呈している。表面には刃部から胴部にかけて自然面を残しており、胴部上半部は割断後に再調整されたため主剥離面が2つ観察される。裏面も再調整のため不規則な剥離が認められる。刃部は表面では自然面を利用し、裏面は下端部に長軸方向と直交する1回の大きな剥離を行うことによって斜刃の刃部を作っている。

石　皿

11－11．表面を浅く抉って皿状に整形した石皿の側縁部破片であり、比較的よく使用されている。

11－12．不整楕円形で薄い未加工の河原石を利用し、表面に長軸方向に並ぶ2か所の小孔が認められる。また表裏面に部分的な研磨面を残す。

5号敷石住居跡出土石器（図面12・13　図版22・23）

本住居跡より24点の石器又は礫が出土しこれは全体の8.1%である。これらの内図示した石器は、敷石内や敷石に転用し検出された遺物である。

掻　器

12－1．両面に調整が及び、右側縁部が刃部に調整されている。

打製石斧

12－2．縦長の第一次剥片をそのまま利用し、打瘤の除去と側縁部の一部に調整が行われて

いる。未製品である可能性も考えられる。

磨　石

12－3．不整楕円形で比較的厚手の割礫を使用し、表面に長軸方向に並ぶ3か所の小孔が認められる。

石　皿

12－4～13－5．未加工の薄い河原石を利用しその平坦面を磨面としており、全て接合資料である。13－3は表面に長軸方向に並ぶ2か所の小孔をあけた後に磨面としている。13－4は左側縁部に剥離による平坦面を作り磨面としている。

4号集石土坑出土石器（図面13　図版23）

本集石土坑から出土した石器は打製石斧が1点のみで、この遺物は集石内の中程より検出された。

打製石斧

13－6．側縁部の調整は丁寧な階段状剥離が施されており、表面は側縁部調整の及ぶ範囲で剥離が行われ、刃部から胴部中央には自然面が残る。裏面は左右からの剥離で丁寧な調整が行われ、刃部は斜刃で断面は「V」形に整形されている。欠損部には周辺からの微調整が施されており、欠損後も再利用されたことを示している。

遺構外出土石器（図面13・14　図版23・24）

遺構外出土の石器・礫は78点を数え全体の26.4%を占める。これらの遺物は包含層であるⅢb層より検出された。

打製石斧

13－7．　不定形で厚い剥片を利用し、表面に部分的に自然面を残すものの全体に丁寧な調整によって仕上げている。側縁部は表裏面からの階段状剥離によって調整され、基部から刃部にかけてやや「ハ」状に広がっている。刃部表面は微調整、裏面は細剥離と微調整によって半円形に彎曲した円刃に仕上げている。

石　鏃

14－1．全面に丁寧な調整が施されている。片脚がやや短く太いが正三角形を呈しており、基部には方形の深い抉りが胴部中央にまでおよぶ。

石　錐

14－2．不定形で表面に自然面を大きく残す厚い剥片を利用している。先端部は表面では左縁から2回、裏面では左右から2～3回の剥離によって断面が三角形になるように仕上げてい

る。

石　匙

14－3．不定形で表面に自然面を大きく残す厚い剥片を利用している。つまみ部は表裏面からの数回の剥離で三角形状に整形され、さらに器厚を均一にするために右側縁部には表裏面からの細剥離が行われている。刃部は剥片の縁辺部を利用し裏面での数回の剥離で仕上げているが、中央部に浅い抉りと微調整が施されており、これは部分的な刃部欠損後の再調整と考えられる。

打製石斧

14－4．表裏面を丁寧な剥離で調整し、両側縁部表面は大剥離、裏面は連続する微調整で鋭利に仕上げられている。屈曲部には集中的に調整が加えられ、基部周辺はほぼ平行だが側縁部上半から刃部にかけては「ハ」状に広がる。刃部は表裏面ともに2～3回の剥離によって薄く鋭い「V」形に調整されやや斜刃である。

14－5．基部周辺の両側縁部に屈曲部を持つが基部の形状は不正形で、表面には部分的に自然面を残すが表裏面ともに丁寧な剥離によって調整されている。側縁部は大剥離による粗い整形の後、連続する細剥離によって屈曲部から胴部上半部までは「ハ」状に広がり、胴部上半部から刃部までは平行である。刃部は表裏面ともに数回の剥離の後に連続する微調整によって鈍い「V」形に調整されている。

14－6．横長の第一次剥片を素材とし洋梨形を呈している。剥片の鋭利な縁辺部を利用し打瘤を除去する大剥離と、側縁部から刃部にかけて連続する細剥離によって調整され、裏面には主剥離面を残す。素材とした剥片そのものが薄く縁辺で鋭利であることから、刃部断面は薄く鋭い「V」形を呈する。

14－7．基部に部分的な自然面を残す左右対称で台形の剥片を素材としており、その鋭利な縁辺部に部分的な微調整を加えて側縁部と刃部を作っている。また刃部には凹凸と微調整が認められるが、これは刃部欠損後の再調整である。

14－8．左右対称で遺物の全面に剥離調整がおよぶ長方形を呈する。割断面に微調整が施されているため、基部の欠損後に調整が行われ再利用されたものと考えられる。刃部は直刃で表面には1回の大剥離と微調整が施され、裏面は微調整のみが行われているため分厚く鋭利さはない。

14－9．横長の第一次剥片を素材とし狭長で刃部が尖頭状を呈する。表面に自然面を広く残し、剥片の鋭利な縁辺部を利用して打瘤を除去する大剥離と、側縁部から刃部にかけて連続する細剥離によって調整されているが、刃部を尖頭状に調整するため裏面から4～5回の大きな剥離が施されている。ほぼ左右対称であるが基部が斜めになっており、これは基部欠損後に再

調整が行われたためである。

14－10. 胴部下半が欠損しており刃部の状況は不明である。表面には自然面を広く残しているが、裏面は丁寧な剥離で調整されている。

14－11. 胴部上半部は欠損し、両側縁部は連続する丁寧な剥離で調整されて平行になり、表裏面は左右からの大剥離と細剥離を交互に行っているため平坦に整形されている。刃部は半円形の円刃であるが断面を観察すると、表面は角があり裏面は彎曲していることから刃部調整中の未製品の可能性もある。

14－12. 表面に自然面を広く残す楕円形剥片を素材とし、縁辺部に連続する微調整を行っているが、側縁部と刃部を作る調整途中の未製品である。

石　皿

14－13. やや歪んだ円形の薄い河原石をそのまま利用し、側縁部に2か所の敲打痕が認められる。研磨面は表面のほぼ全面におよぶ。

種別	深鉢形土器											浅鉢形土器	不明	合計
	勝坂			阿玉台	加曽利E									
出土区	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	後期			
4号住居跡	3	183	6	70					230	1			5	325	823
5号敷石住居跡		15		4						2	35			116	172
4号集石土坑		5	1	1										5	12
3号土坑		77		11									1	70	159
4号土坑		12												21	33
小穴		8	4	5										31	48
遺構外	3	221	37	83					61	2	3	3	3	491	907
合計	6	521	48	174					291	5	38	3	9	1059	2154

第2表　出土土器集計表

種別	打製石斧		磨製石斧	石鏃	縄文石器	石匙	石錐	石皿	磨石	小計	剥片	分割礫	礫片	合計
出土区	完	欠												
4号住居跡	2	19		1	2	1		4	2	31	103		52	186
5号敷石住居跡	1				1			10	4	16		8		24
4号集石土坑		1								1				1
3号土坑											1			1
4号土坑		1								1				1
小穴								1	1	2	3			5
遺構外	11	25	1	1		1	1	3		43	35			78
合計	14	46	1	2	3	2	1	18	7	94	142	8	52	296

第3表　出土石器集計表

図面番号	図版番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質
11－1	21	4号住	石鏃	2.6	1.7	0.5	1.1	黒曜石
11－2	21	4号住	石匙	6.7	5.5	1.4	29.0	砂岩
11－3	21	4号住	掻器	5.8	6.3	1.6	72.1	砂岩
11－4	21	4号住	掻器	3.7	7.5	1.3	32.0	安山岩
11－5	21	4号住	硬玉製原石	7.4	6.2	4.0	230.0	硬玉
11－6	21	4号住	打製石斧	13.6	5.0	1.6	92.0	砂岩
11－7	21	4号住	打製石斧	12.0	5.1	1.5	100.2	砂岩
11－8	21	4号住	打製石斧	10.5	5.1	2.2	115.0	砂岩
11－9	21	4号住	打製石斧	13.0	6.4	3.7	440.0	砂岩
11－10	21	4号住	打製石斧	11.1	5.0	2.1	109.0	花崗岩
11－11	21	4号住	石皿	44.1	19.3	4.6	8,000.0	花崗岩
11－12	21	4号住	石皿	20.8	14.6	3.3	1,385.0	花崗岩
12－1	22	5号住	掻器	4.4	3.2	0.8	14.0	チャート
12－2	22	5号住	打製石斧	13.3	3.6	1.3	90.0	輝絞岩
12－3	22	5号住	磨石	21.9	12.5	4.2	1,400.0	緑泥片岩
12－4	22	5号住	石皿	26.6	21.6	10.4	7,950.0	花崗岩
12－5	22	5号住	石皿	11.9	13.4	4.9	927.0	花崗岩
12－6	22	5号住	石皿	21.0	10.2	5.2	1,645.0	花崗岩
12－7	22	5号住	石皿	17.0	12.1	5.5	1,318.0	花崗岩
13－1	23	5号住	石皿	14.8	11.0	6.0	1,260.0	花崗岩
13－2	23	5号住	石皿	15.9	10.4	9.7	1,825.0	花崗岩
13－3	23	5号住	石皿	26.5	14.3	5.0	2,080.0	花崗岩
13－4	23	5号住	石皿	45.7	16.7	8.0	16,700.0	砂岩
13－5	23	5号住	石皿	28.2	26.6	13.4	10,700.0	花崗岩
13－6	23	4号集	打製石斧	10.2	6.3	3.0	215.0	砂岩
13－7	23	遺構外	打製石斧	8.8	5.3	1.8	82.0	安山岩
14－1	24	遺構外	石鏃	1.4	1.4	0.3	0.3	黒曜石
14－2	24	遺構外	石鏃	8.8	4.6	2.3	79.0	安山岩
14－3	24	遺構外	石匙	7.9	10.0	1.6	107.0	砂岩
14－4	24	遺構外	打製石斧	8.6	4.5	0.8	32.0	安山岩
14－5	24	遺構外	打製石斧	11.3	5.3	1.5	98.0	砂岩
14－6	24	遺構外	打製石斧	11.6	5.7	4.3	102.0	砂岩
14－7	24	遺構外	打製石斧	10.3	8.1	4.0	370.0	砂岩
14－8	24	遺構外	打製石斧	8.7	5.4	2.5	153.0	砂岩
14－9	24	遺構外	打製石斧	13.1	4.2	2.3	115.0	泥岩
14－10	24	遺構外	打製石斧	10.8	8.7	2.5	235.0	安山岩
14－11	24	遺構外	打製石斧	9.8	8.2	1.8	133.0	粘板岩
14－12	24	遺構外	打製石斧	12.5	8.6	2.2	230.0	砂岩
14－13	24	遺構外	石皿	13.3	13.1	2.8	705.0	花崗岩

第4表　出土石器計測表

Ⅵ 小　　結

第５次調査で検出された遺構は住居跡２軒、集石土坑・土坑各２基と少ない。本遺跡では平成元年度末までに６次の調査が実施されているが、各調査地点とも遺構の存在は比較的希薄である。検出遺構は住居跡６軒、集石土坑６基、土坑８基、埋甕３基を数えるのみで、時期はいずれも縄文中期勝坂式期から加曽利Ｅ式期である。調査地点が集落の中でどのような位置を占めるのかなど今後の調査にかかる問題も多いが、近接する恋ヶ窪遺跡と比較すると遺構密度は低そうである。野川源泉部の遺跡群で各遺構がどのような関係をもって存在をしていたのか、全体の中でとらえていかなければならない問題である。

次に各遺構について触れてみたい。４号住居跡は勝坂Ⅱ式期の住居跡で、周辺の集落遺跡の中でも初現期に位置づけられる遺構である。恋ヶ窪遺構をはじめとする野川流域源泉部の遺跡群は、そのほとんどが勝坂Ⅱ式期以降に集落が形成されている。[註1] それ以前では中期初頭五領ヶ台期に恋ヶ窪南遺跡で集落が形成される。[註2] が、勝坂Ⅰ式期に属する明確な遺構は今のところ検出されていない。恋ヶ窪東遺跡では４号住居跡のすぐ西側でも勝坂Ⅱ式期と思われる住居跡が検出されており、[註3] 今回検出の３号土坑も４号住居跡とほぼ同時期の遺構である。検出遺構が最も多い恋ヶ窪遺跡でも勝坂Ⅱ式期の遺構は少なく、その中でも比較的後半に位置づけられるものが多そうである。このような状況からみると、４号住居跡はこの地域の縄文中期の集落形成を考えるうえで貴重な資料となるであろう。

５号住居跡は加曽利Ｅ式終末期の柄鏡形敷石住居跡である。国分寺市内では今までに５軒の敷石住居跡が調査または確認されており、その内訳は恋ヶ窪遺跡で調査１軒・確認１軒、羽根沢遺跡で調査１軒・確認２軒[註4]である。但し、調査は昭和10年代から20年代初めにかけてのもので、加曽利Ｅ式終末期から後期初頭の住居跡と推定されるがその詳細な時期は明らかでなかった。恋ヶ窪遺跡の調査例は主体部奥壁寄りに敷石が遺存していたのみであるが、縁石は立っているように見える。また、羽根沢遺跡の調査例は炉辺部と周縁部に敷石が施され、柄の部分にも若干敷石があり、周縁部の敷石は立っている。このように両者とも周縁部敷石が立つ構造をしている点は５号敷石住居跡と類似する。特に、羽根沢遺跡の例は炉辺部敷石を含めた敷石全体の状況も似ている。これらの事を考えると、今回の調査で時期が明確にされ遺存状態の良好な敷石住居跡が検出された意味は大きい。ところで、今までに調査・確認された敷石住居跡はいずれも野川の源泉部で開析谷に面した台地縁辺から崖線部に位置しているのに対し、今回検出された５号敷石住居跡は西側に野川の開析谷があるものの台地のやや中央部に位置している。こうした遺構選地の違いは何によるのであろうか。恋ヶ窪遺跡では加曽利Ｅ式期第Ⅴ段階を最

後に台地上では集落形成がなされなくなり、台地縁辺や崖線部に敷石住居跡が僅かに構築されるといった状況となる。一方、周辺の羽根沢遺跡や恋ヶ窪東遺跡・花沢西遺跡など加曽利E式期第Ⅴ段階の遺構が僅かしか認められない遺跡でも、第Ⅴ段階以降の敷石住居跡や屋外埋甕などが検出されている。[註5] このように加曽利E式終末期はそれまでの遺跡立地と異なった遺跡構成をするようになり、それが後期の遺跡形成に続くものといえよう。国分寺市域での縄文後期の遺跡は花沢西遺跡で称名寺式の土器が、恋ヶ窪遺跡で堀之内式の土器が僅かに出土しているほか、野川に面した立川面の八幡前遺跡で堀之内式から加曽利B式期の石器製作跡が検出されている程度で少ない。[註6] 野川を下った小金井市や三鷹市などでも武蔵野台地上の遺跡は少なくなり、崖線下の立川面に遺跡が認められるようになる。

最後に5号敷石住居跡の構造について触れておきたい。敷石は住居跡主体部の壁周縁部と炉辺部に施されている。炉辺部の敷石は石囲炉と一体になっており、住居構築時に敷設したものといえる。これに対し、周縁部敷石は敷石下部より柱穴が検出されたり、敷石と床面に僅かな隙間があることなどから住居に直接伴うものではなく、住居廃絶後まもなく施されたものと考えられる。この場合、上屋はなくなっているが住居跡はほとんど埋没しておらず炉なども見える状況が推察される。このような状況の中でどのような理由で敷石を行っているのであろうか。具体的な回答は持ち合わせていないが、住居廃絶後に関係したものかもしれない。敷石住居跡の敷石は、住居構築時に施しただけでなく住居廃絶後に施したものもあることが考えられ、敷石住居跡の性格などについてはこれらの事も考慮して検討していかなくてはなるまい。

註1　広瀬昭弘・秋山道生・砂田佳弘・山崎和巳　1985「縄文時代集落の研究－野川流域の中期を中心として－5．野川上流域の縄文時代中期遺跡」『東京考古3』

註2　恋ヶ窪南遺跡において縄文時代中期初頭の五領ヶ台期住居跡3軒、集石土坑11基が検出されている。1987「恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報Ⅰ」

註3　本町4丁目公共下水道面整備に伴う発掘調査において、勝坂Ⅱ式期の住居跡が検出されている。今回の調査区との位置関係は4号住居跡の西側約8mの地点である。(恋ヶ窪東遺跡第2次調査)

註4　恋ヶ窪遺跡においては2軒の敷石住居跡が確認されている。その内1軒は、昭和12年に後藤守一氏により「武蔵国分寺村における敷石住居跡の発掘」と題して『考古学雑誌』に報告されているものである。この敷石住居跡の所在は、西恋ヶ窪1丁目15番地内で恋ヶ窪遺跡の南側斜面に位置する。他の1軒は、西武国分寺線の切り通し部分で確認されており、日立中央研究所構内に所在する。

羽根沢遺跡においては昭和23年に学習院大学の市川健二郎氏の指導により、日立中央研究所構内南斜面部分の発掘調査を行い敷石住居跡1軒が確認され、その他にも2軒の敷石住居跡が存在する可能性を指摘している。1949「武蔵国分寺恋ヶ窪敷石遺跡発掘調査報告」『学習院史学会報1』

註5　日立中央研究所構内において施設工事に伴う発掘調査を行い、加曽利E式期第Ⅵ段階の屋外埋甕が3基検出されている。(羽根沢遺跡第2次調査)

東京電力鉄塔建替え工事に伴う発掘調査において、今回の調査区北側約70mの地点で屋外埋甕1基が検出されている。(恋ヶ窪東遺跡第4次調査)

共同住宅建設工事に伴う発掘調査により、加曽利E式期第Ⅴ～Ⅵ段階の屋外埋甕が3基検出されている。『花沢西遺跡第2次調査』『国分寺市史　上巻』

註6　昭和24年に八幡前遺跡の発掘調査が行われ、吉田格氏により「武蔵国分寺町八幡前遺跡概報」として『武蔵野』に報告されている。

参　考　文　献

安孫子昭二・秋山道生・中西充　1980「東京・埼玉における縄文中期後半の編年試案」『神奈川考古10』

安孫子昭二　1988「勝坂式土器様式」『縄文土器大観２』　小学館

安藤文一　1982「翡　翠」『縄文文化の研究』　雄山閣

石岡憲雄・戸田哲也・西川博孝　1983「施文原体」『縄文文化の研究』　雄山閣

市川健二郎　1949「武蔵国分寺恋ヶ窪敷石遺跡発掘調査報告」『学習院史学会報１』

木下亀城・小川留太郎　1967『岩石鉱物』　保育社

国分寺市　1986「国分寺市史　上巻」

小島俊彰　1983「有孔球状土製品」『縄文文化の研究』　雄山閣

滝口宏　1985「武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅶ」　武蔵国分寺遺跡調査会

滝口宏　1987「恋ヶ窪南遺跡発掘調査概報Ⅰ」　国分寺市遺跡調査会

滝口宏　1988「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅳ」　国分寺市遺跡調査会

永峯光一　1979「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」　恋ヶ窪遺跡調査会

永峯光一　1980「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」　恋ヶ窪遺跡調査会

永峯光一　1982「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ」　恋ヶ窪遺跡調査会

広瀬昭弘・秋山道生・砂田佳弘・山崎和巳　1985「縄文時代集落の研究－野川流域の中期を中心として－」
『東京考古３』

三輪善之助　1922「武蔵国分寺村発見の土器」『人類学雑誌37－12』

山内清男　1979「日本先史土器の縄文」　先史考古学会

山本暉久　1976「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化28－２・３』

山本暉久　1982「敷石住居」『縄文文化の研究』　雄山閣

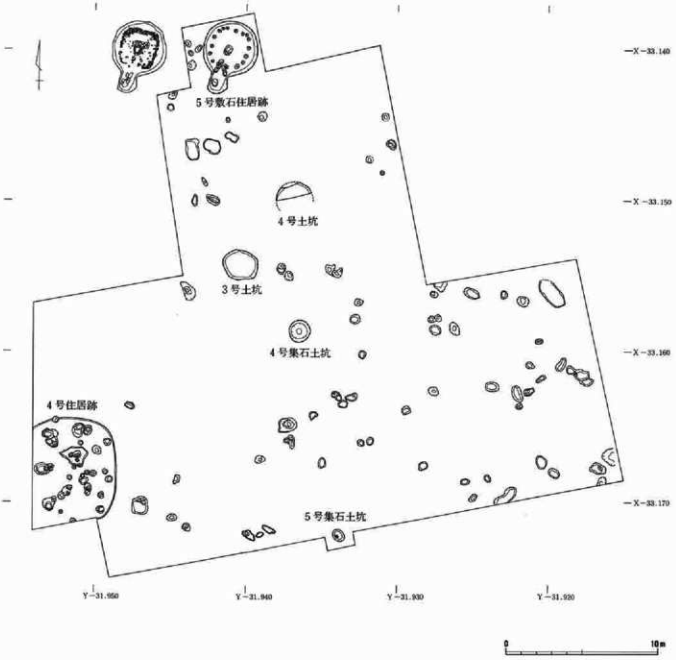
吉田格　1951「武蔵国分寺町八幡前遺跡概報」『武蔵野33－３・４』

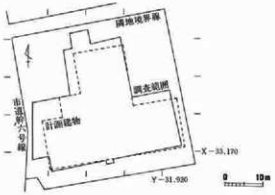
吉田格　1957「東京都国分寺町恋ヶ窪竪穴住居址の土器に就いて」『網蘚12』

吉田格　1962「東京都国分寺町中期縄文式住居址調査概報」『武蔵野41－３・４』

図　　面

図面1　遺構全体図

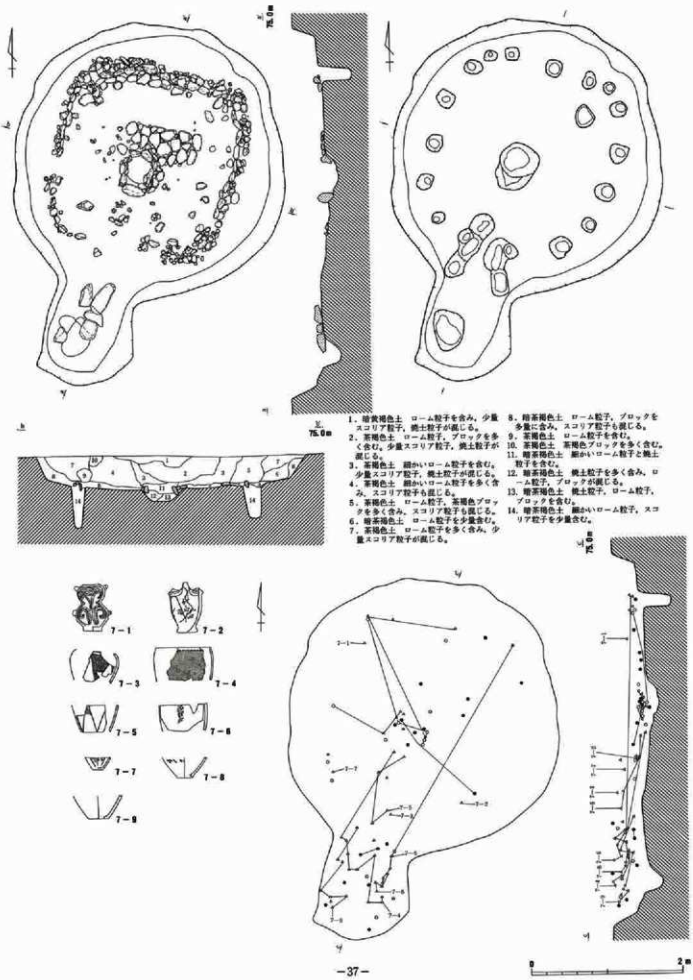

5号敷石住居跡
4号土坑
3号土坑
4号集石土坑
4号住居跡
5号集石土坑
X−33.140
X−33.150
X−33.160
X−33.170
Y−31.950
Y−31.940
Y−31.930
Y−31.920
0
10m


調査区域
調査区域
市道第六号線
計画建物
X−33.170
Y−31.930
0
10m

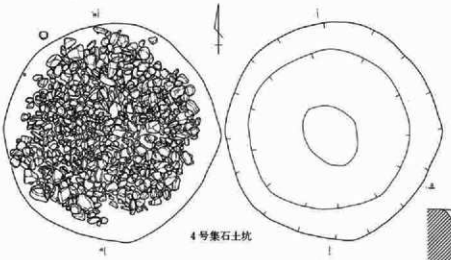
図面2　4号住居跡

1. 暗茶黒褐色土　ローム粒子を多量に含み，赤色スコリア炭化物が少量混じる。
2. 暗茶褐色土　細かいローム粒子を多量に含み，炭化物・赤色スコリアが少量混じる。
3. 茶褐色土　ローム粒子を多く含み部分的に集中する所がある。
4. 暗黄褐色土　ロームブロック粒子を多く含む。
5. 暗茶褐色土　細かいローム粒子を多量に含み，炭化物等も多く混じる。
6. 暗茶褐色土　ローム粒子，ブロック，焼土粒子を多く含む。
7. 茶褐色土　細かいローム粒子を多く含み，焼土粒子も混じる。
8. 暗黄褐色土　汚れたローム，ブロックが主体で，少量焼土，炭化物が含まれる。
9. 暗黄褐色土。汚れたローム粒子，ブロックを含む。
10. 黄褐色土　ロームブロック。
11. 茶褐色土　ロームブロックを多く含み，焼土粒子が少量混じる。
12. 暗茶褐色土　ローム粒子，焼土粒子を多く含み，炭化物が少量混じる。
13. 褐色土　焼土ブロック，粒子，ローム粒子を主体とした土層。
範囲内
断面投影
75.0m
5－1
5－2
5－3
5－4
5－5
5－6
5－7

図面3　5号敷石住居跡

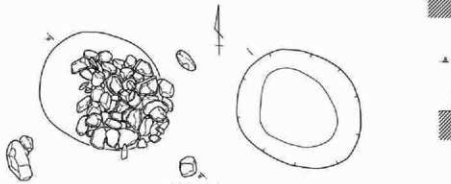

1. 暗黄褐色土　ローム粒子を含み、少量スコリア粒子、焼土粒子が混じる。
2. 茶褐色土　ローム粒子、ブロックを多く含む。少量スコリア粒子、焼土粒子が混じる。
3. 茶褐色土　細かいローム粒子を含む。少量スコリア粒子、焼土粒子が混じる。
4. 茶褐色土　細かいローム粒子を多く含み、スコリア粒子も混じる。
5. 茶褐色土　ローム粒子、茶褐色ブロックを多く含み、スコリア粒子も混じる。
6. 暗茶褐色土　ローム粒子を少量含む。
7. 茶褐色土　ローム粒子を多く含み、少量スコリア粒子が混じる。
8. 暗茶褐色土　ローム粒子、ブロックを多量に含み、スコリア粒子も混じる。
9. 茶褐色土　ローム粒子を含む。
10. 茶褐色土　茶褐色ブロックを多く含む。
11. 暗茶褐色土　細かいローム粒子と焼土粒子を含む。
12. 暗茶褐色土　焼土粒子を多く含み、ローム粒子、ブロックが混じる。
13. 暗茶褐色土　焼土粒子、ローム粒子、ブロックを含む。
14. 暗茶褐色土　細かいローム粒子、スコリア粒子を少量含む。
7-1
7-2
7-3
7-4
7-5
7-6
7-7
7-8
7-9
0
2m

図面4　4・5号集石土坑、3・4号土坑

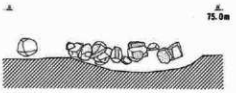


4号集石土坑

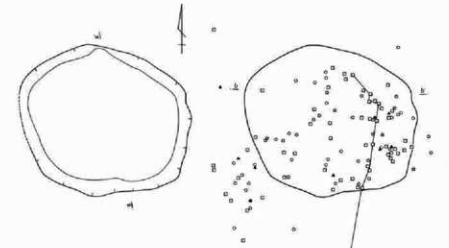
1．黒褐色土　黒みが強く、粒子細く、炭化物粒を多く含み、赤色スコリアも少量含む。
2．茶褐色土
3．茶褐色土　2層よりやや明い炭化物粒を少量含む。
4．暗茶褐色土　細かいローム粒子を少量に含み、炭化物、赤色スコリアが混じる。



5号集石土坑



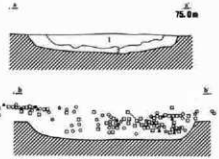
0　1m

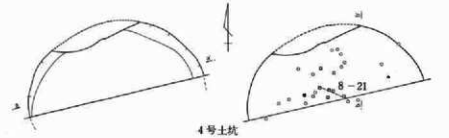


3号土坑

8－1

1．茶褐色土　細かいローム粒子を多く含み、赤色スコリア炭化物も少量混じる。
2．暗黒褐色土　ローム粒子、ブロックと茶褐色土粒子を多く含み、赤色スコリアも少量混じる。

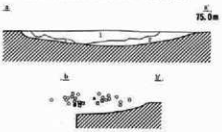




4号土坑

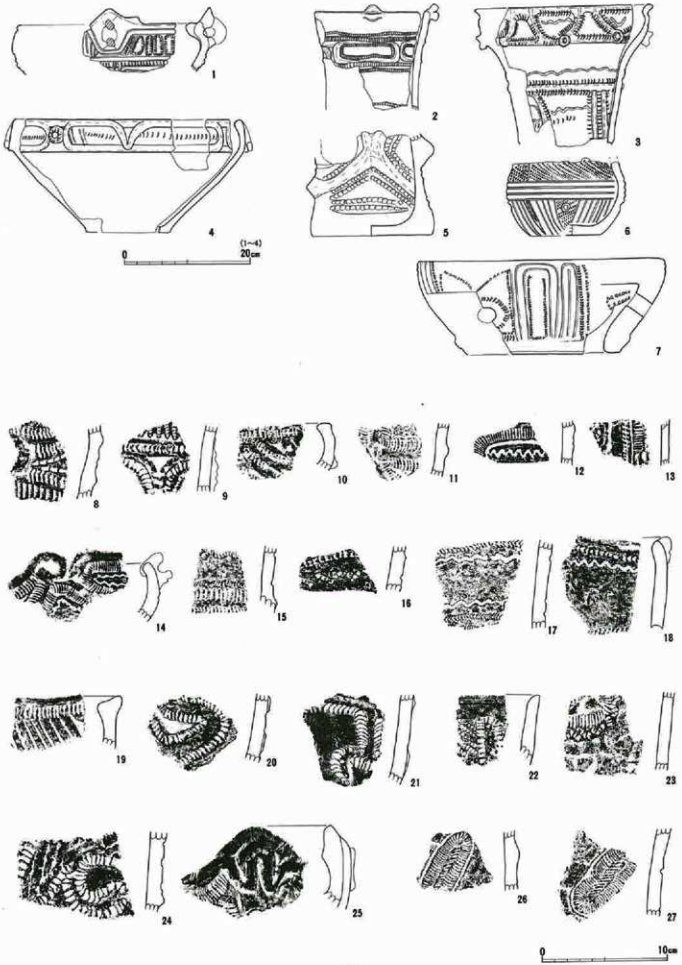
8－21

1．暗茶褐色土　黒みが強い土層で赤色スコリア、炭化物を少量含む。
2．暗黄褐色土　やや汚れたロームブロックと茶褐色土粒子の混合土層で赤色スコリアを少量含む。

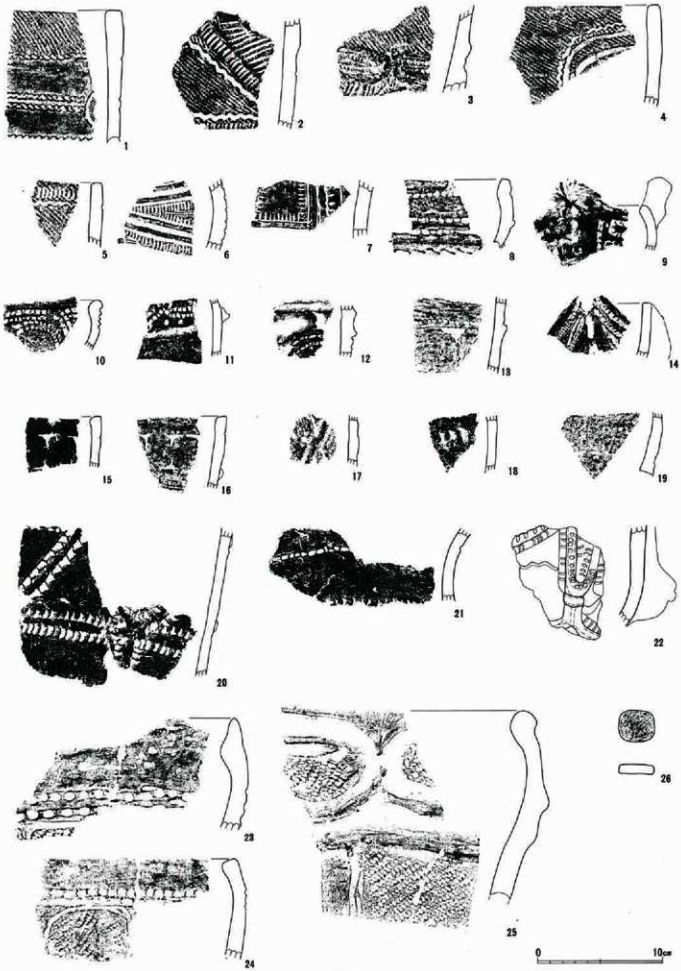


0　2m

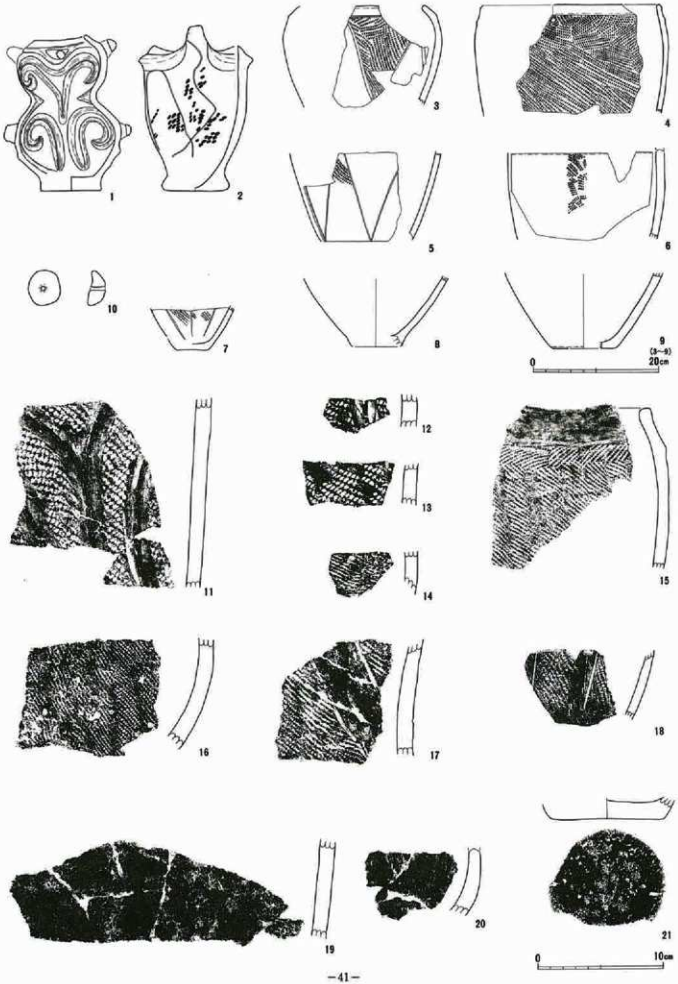
図面5　4号住居跡出土土器



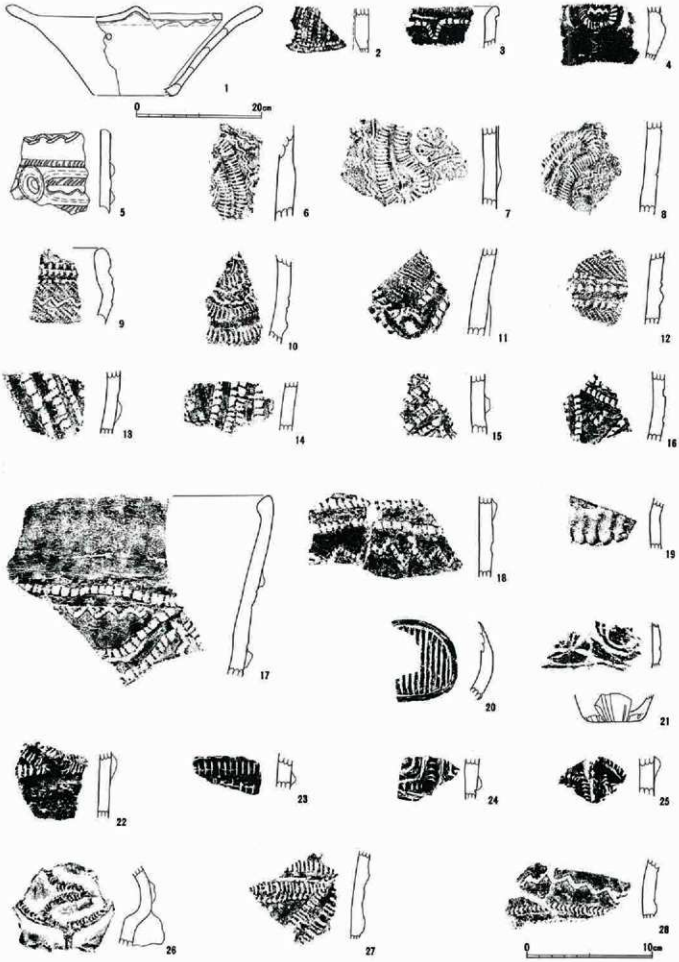
図面6　4号住居跡出土土器



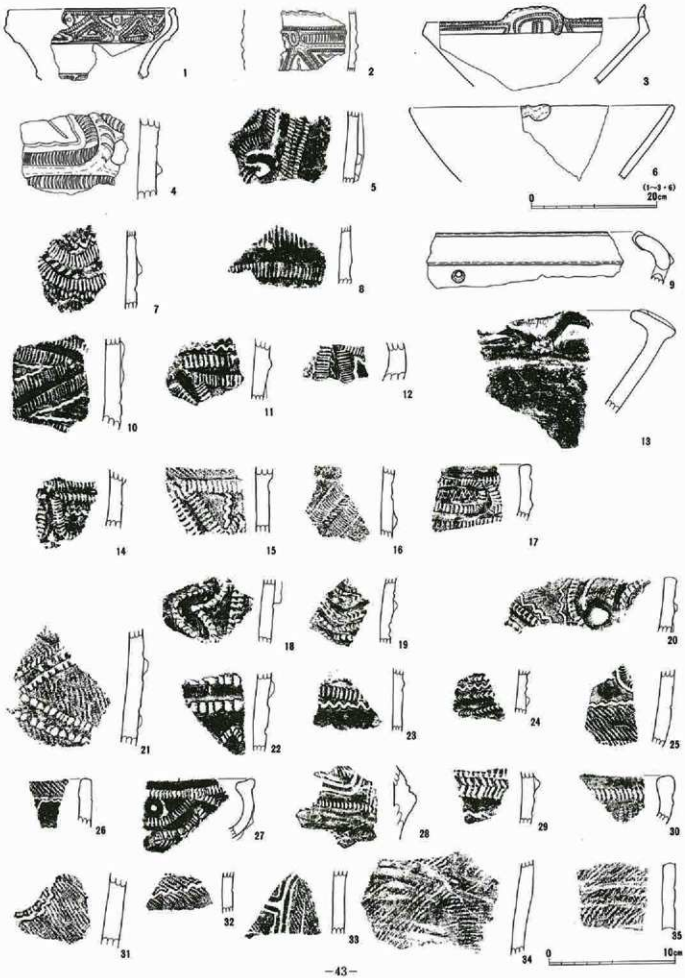
図面7　5号敷石住居跡出土土器



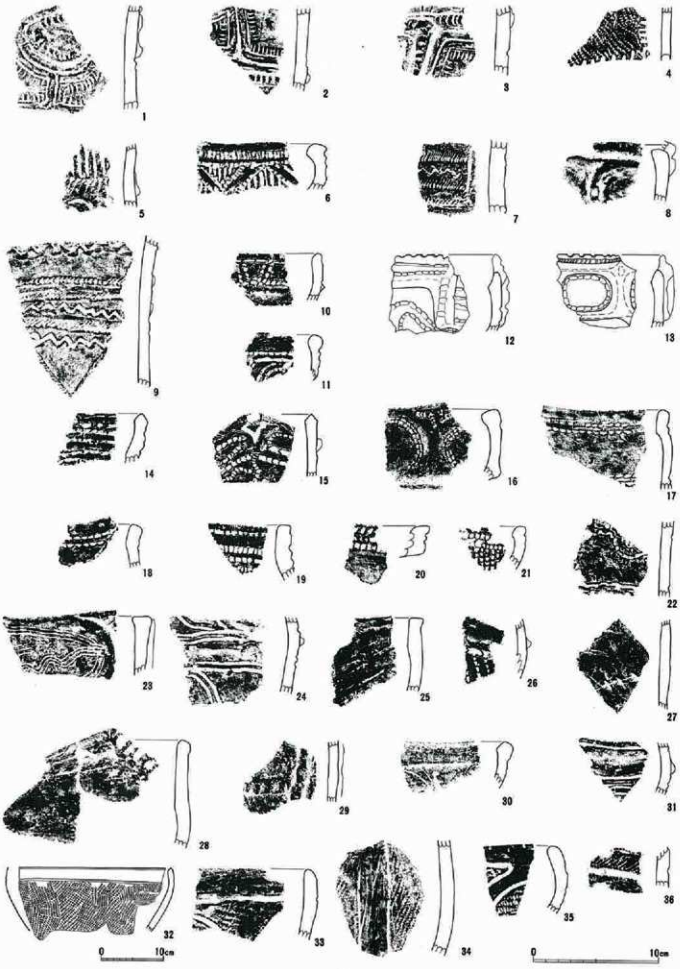
図面8　4号集石土坑、3・4号土坑出土土器



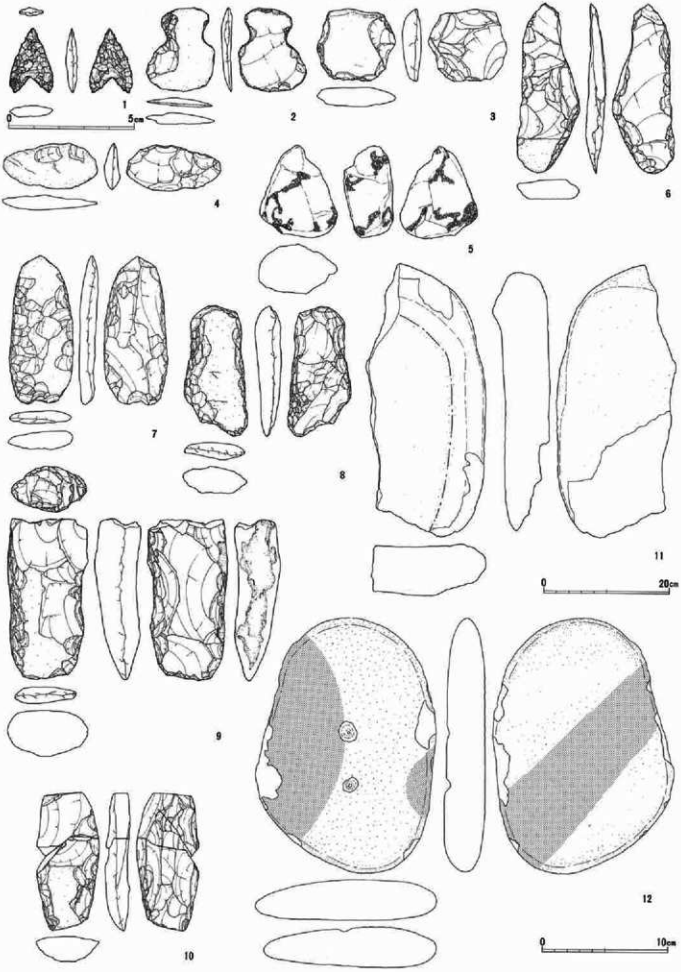
図面9　遺構外出土土器


1
2
3
4
5
6
(1～3・6)
0
20cm
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm

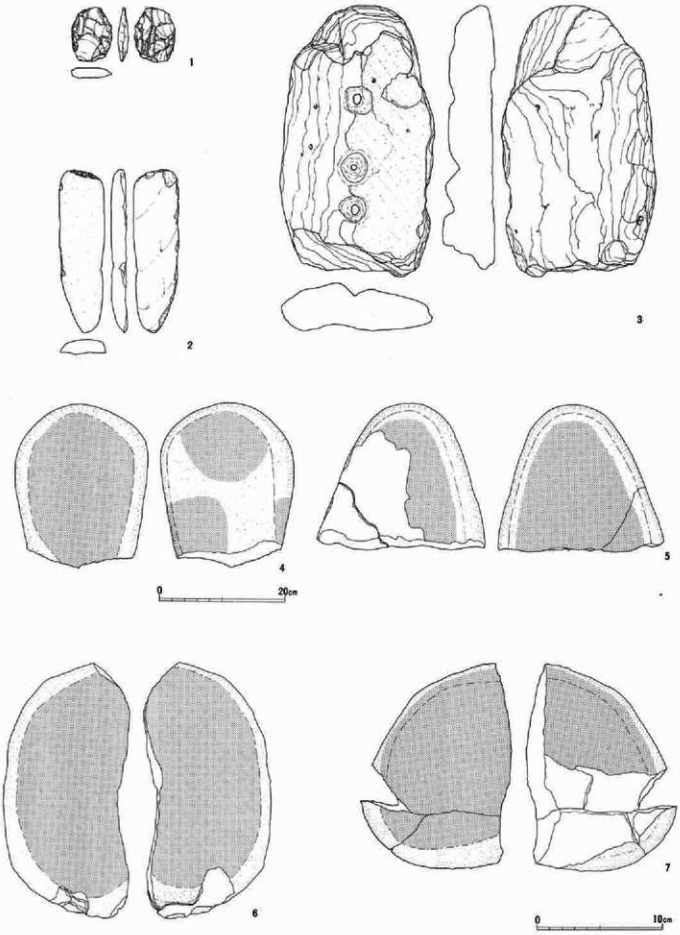
図面10　遺構外出土土器



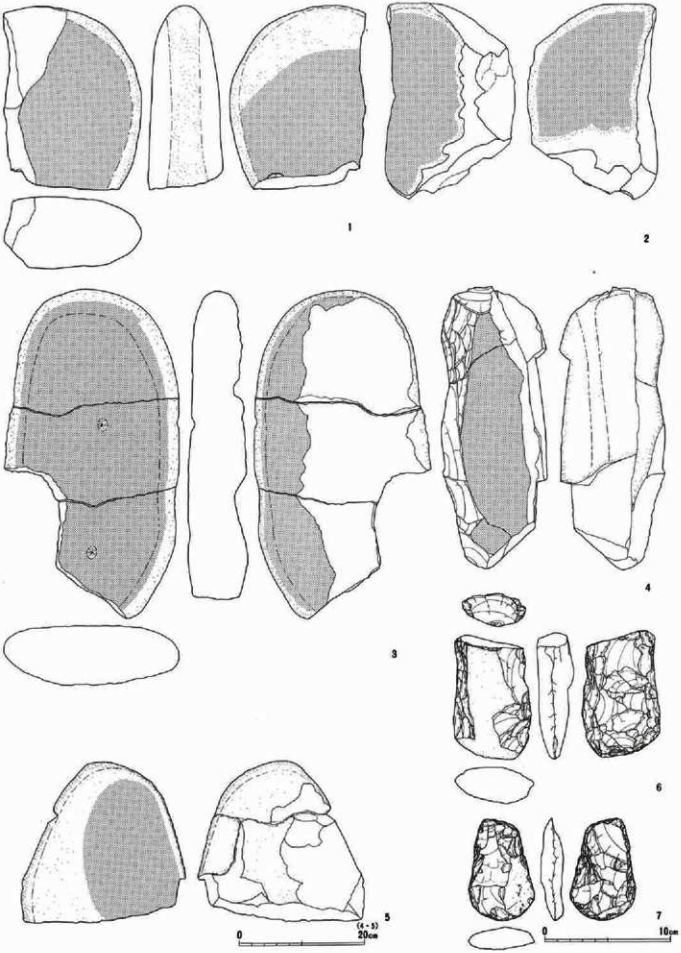
図面11　4号住居跡出土石器



図面12　5号敷石住居跡出土石器



図面13　5号敷石住居跡、4号集石土坑、遺構外出土石器



図面14　遺構外出土石器

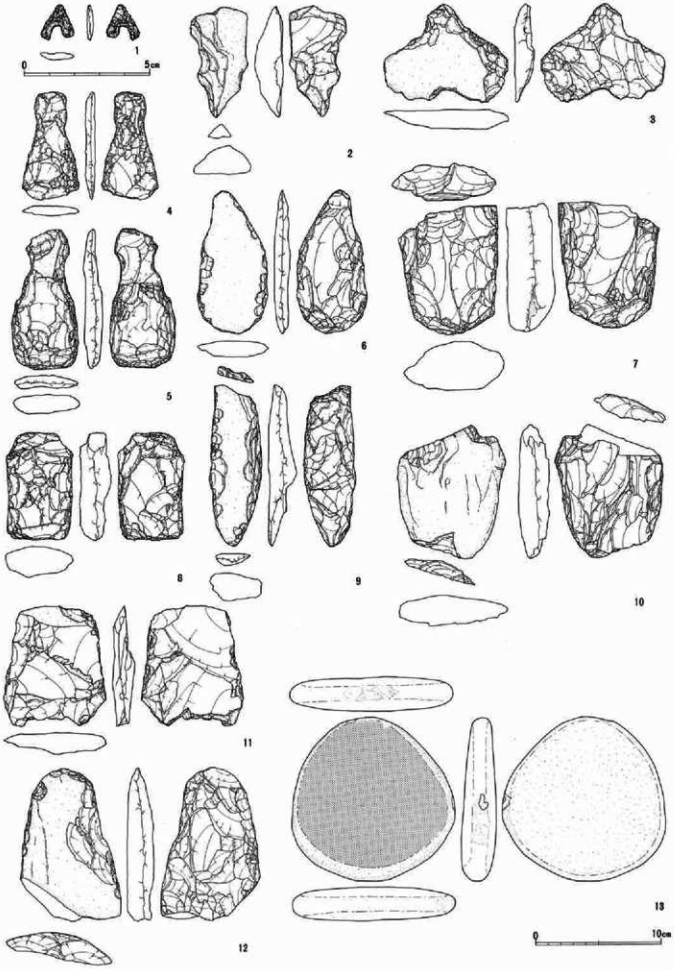


図　版

図版1　調査区全景

1．東側全景（西から）

2．西側全景（北から）

3．北側全景（東から）

図版２　調査区全景

１．中央全景（南から）

２．発掘風景（西から）

３．発掘風景（東から）

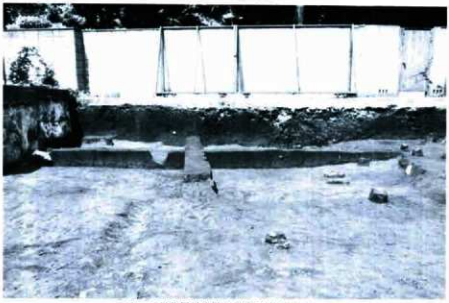
図版３　４号住居跡

１．４号住居跡全景（南から）

２．４号住居跡全景（東から）

３．４号住居跡東西土層断面（南から）

図版4　4号住居跡

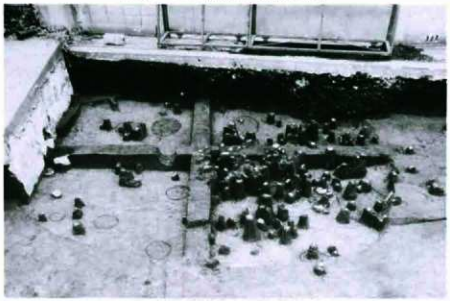


1．4号住居跡南北土層断面（東から）

2．4号住居跡炉跡土層断面（北から）

3．4号住居跡遺物出土状態（南から）

図版５　４号住居跡、５号敷石住居跡



１．４号住居跡遺物出土状態（東から）

２．４号住居跡器台出土状態（北から）

３．５号敷石住居跡全景（西から）

図版6　5号敷石住居跡

1．5号敷石住居跡全景（南から）

2．5号敷石住居跡東西土層断面（南から）

3．5号敷石住居跡炉跡全景（南から）

図版7　5号敷石住居跡

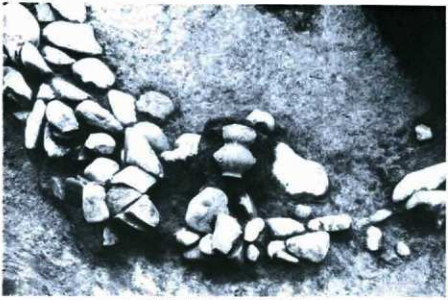
1．5号敷石住居跡炉跡全景（西から）

2．5号敷石住居跡炉跡東西土層断面（南から）

3．5号敷石住居跡完掘全景（南から）

図版8　5号敷石住居跡

1．5号敷石住居跡完掘全景（西から）



2．5号敷石住居跡土器出土状態（西から）

3．5号敷石住居跡土器出土状態（北から）

図版9　4号集石土坑

1．4号集石土坑全景（南から）

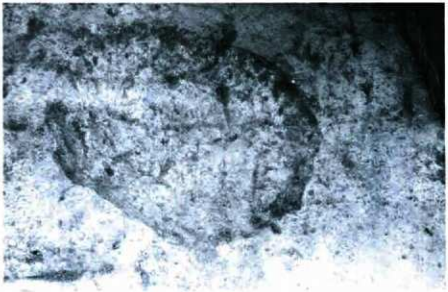
2．4号集石土坑南北土層断面（東から）

3．4号集石土坑完掘全景（東から）

図版10　5号集石土坑

1．5号集石土坑全景（南から）

2．5号集石土坑東西土層断面（北から）

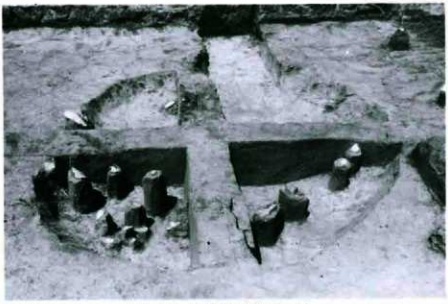


3．5号集石土坑完掘全景（南から）

図版11　3号土坑

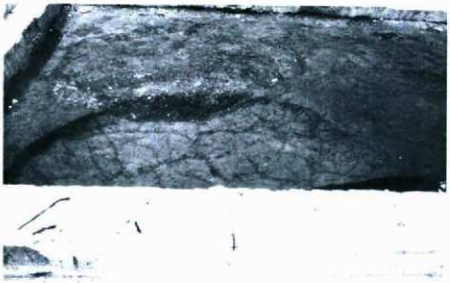
1．3号土坑全景（南から）

2．3号土坑南北土層断面（東から）

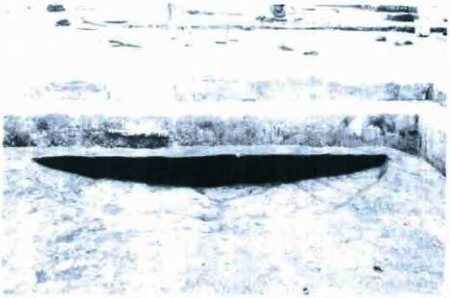


3．3号土坑遺物出土状態（東から）

図版12　4号土坑



1．4号土坑全景（南から）



2．4号土坑東西土層断面（北から）

3．4号土坑遺物出土状態（北から）

図版13　5号敷石住居跡保存処理作業

1．5号敷石住居跡型取り作業風景（西から）

2．5号敷石住居跡型取り作業風景（南から）

3．5号敷石住居跡型取り作業風景（南から）

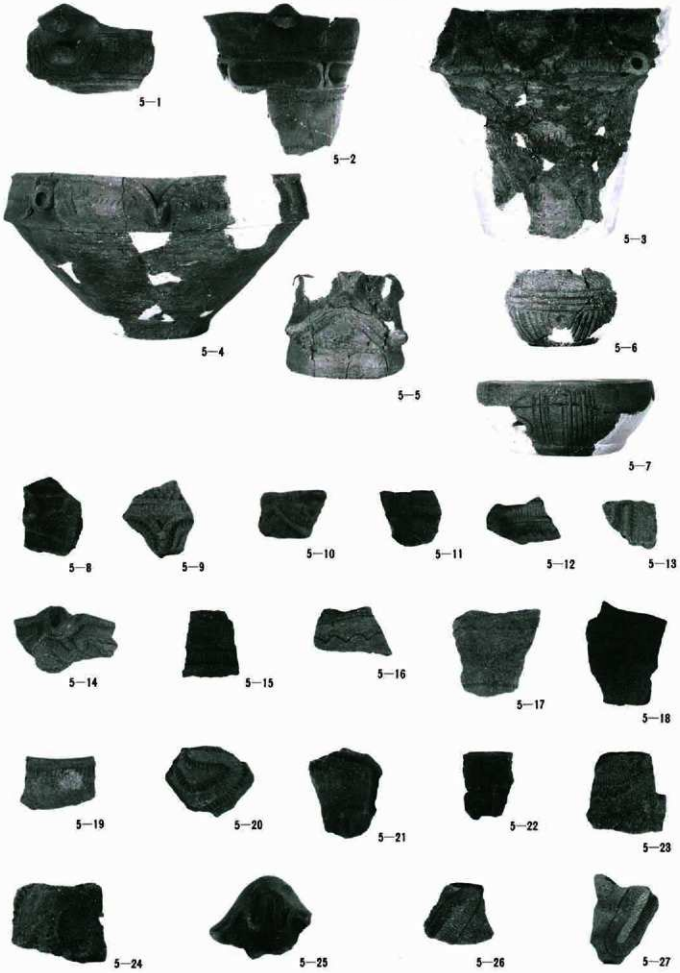
図版14　5号敷石住居跡保存処理作業

1．5号敷石住居跡型取り作業風景（西から）

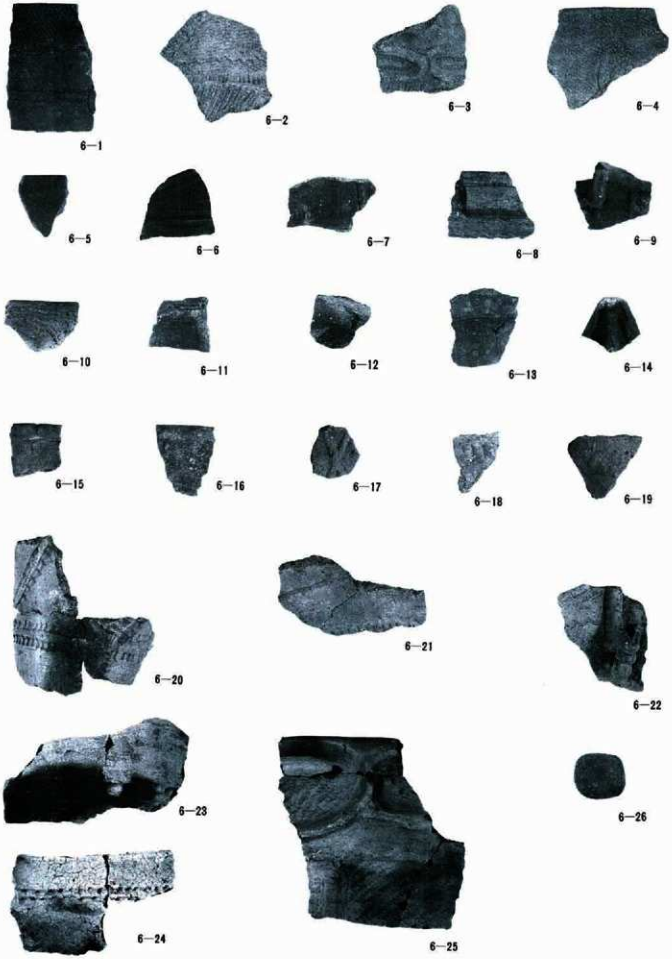
2．5号敷石住居跡型取り作業風景（東から）

3．5号敷石住居跡型取り終了全景

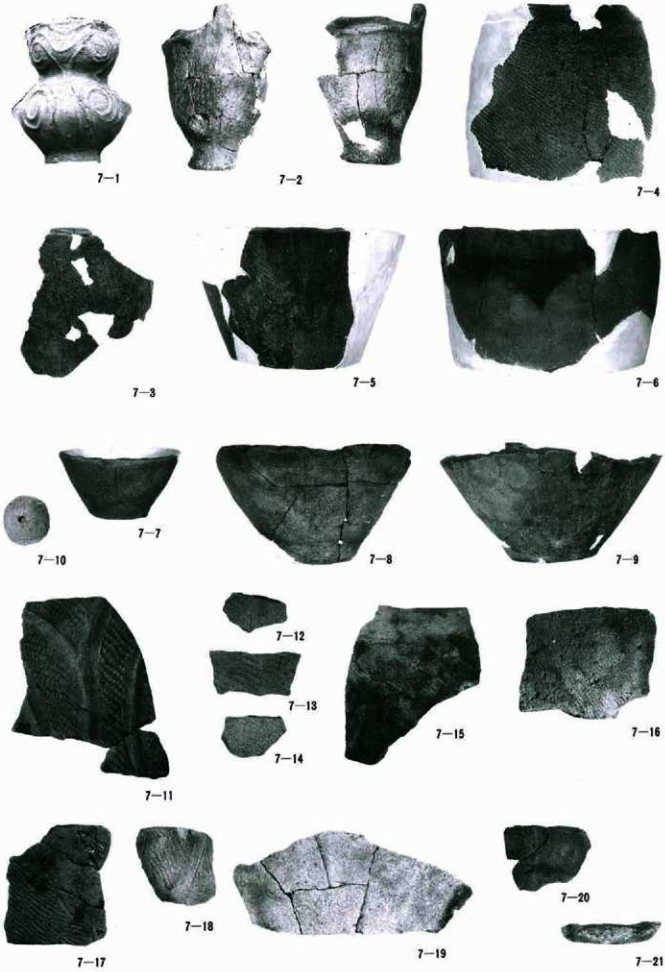
図版15　4号住居跡出土土器



図版16　4号住居跡出土土器



図版17　5号敷石住居跡出土土器



図版18　4号集石土坑、3・4号土坑出土土器

8—1

8—2

8—3

8—4

8—5

8—6

8—7

8—8

8—9

8—10

8—11

8—12

8—13

8—14

8—15

8—16

8—17

8—18

8—19

8—20

8—21

8—22

8—23

8—24

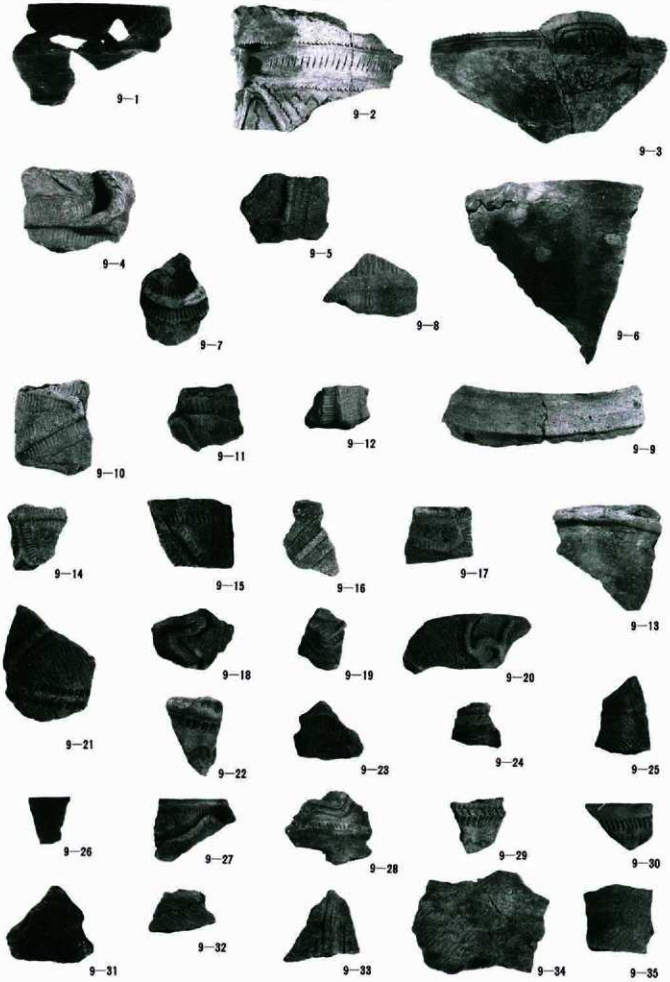
8—25

8—26

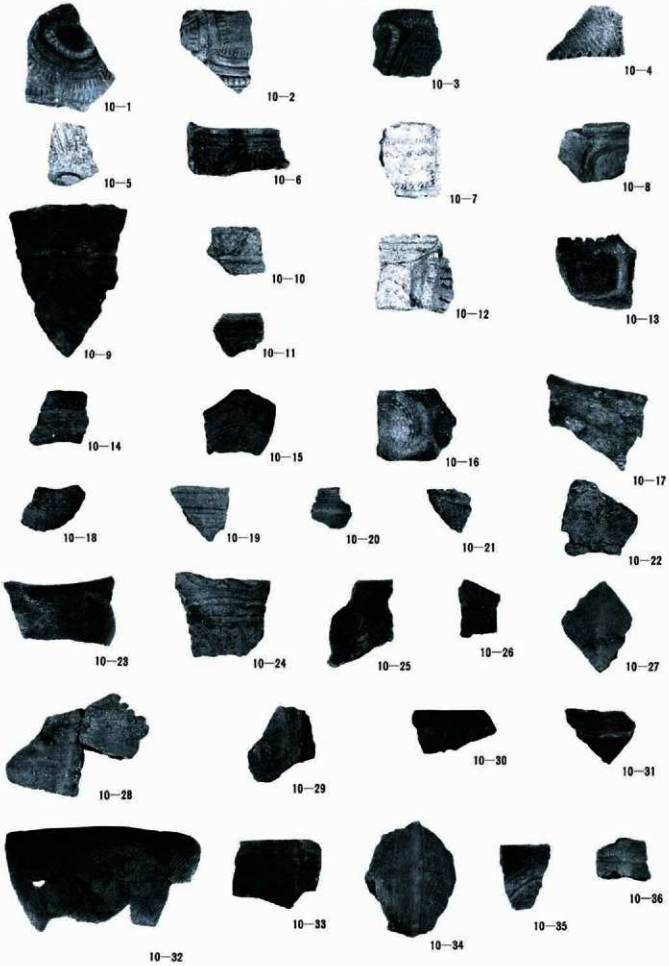
8—27

8—28

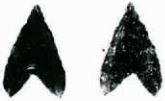
図版19　遺構外出土土器



図版20　遺構外出土土器



図版21　4号住居跡出土石器



11—1

11—2

11—3

11—4

11—5

11—6

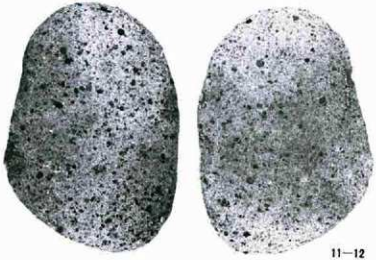
11—7

11—8

11—9

11—10

11—11



11—12

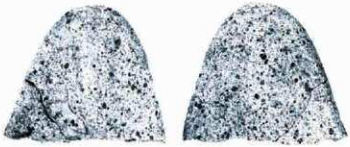
図版22　5号敷石住居跡出土石器

12—1

12—2

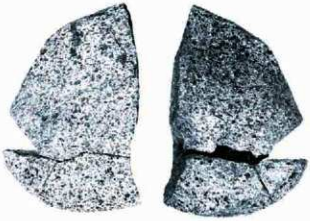
12—3

12—4



12—5

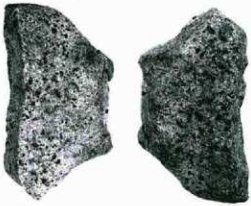
12—6



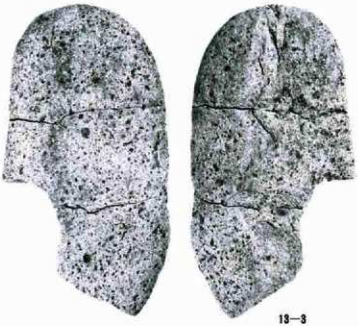
12—7

図版23　5号敷石住居跡、4号集石土坑、遺構外出土石器

13—1



13—2



13—3

13—4

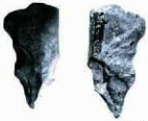
13—6

13—5

13—7

図版24　遺構外出土石器

14—1



14—2

14—3

14—4

14—5

14—6

14—7

14—8

14—9

14—10

14—11

14—12

14—13

恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅰ

－山一證券国分寺独身寮建設に伴う調査－

発行日　平成２年３月31日

編著者　国分寺市遺跡調査団

©　（団長　滝口　宏）

発行所　国分寺市遺跡調査会

〒185　国分寺市戸倉１－６－１

ＴＥＬ　0423-25-0111（代表）

東京都国分寺市教育委員会内

印刷所　第一法規出版株式会社

令和３年（2021）９月９日　デジタル版作成